

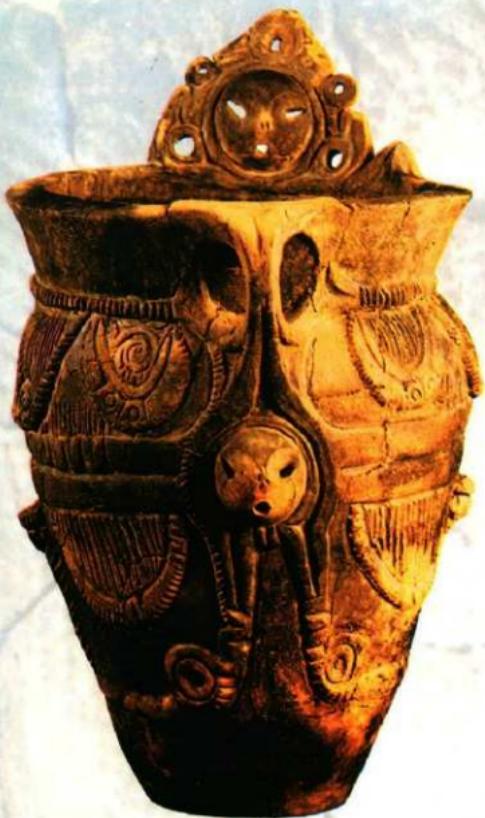
長野県立歴史館

Nagano Prefectural
Museum of History

1996年夏季企画展図録

縄文人の一生

——北村遺跡に生きた人びと——



期間／7月20日(土)～8月25日(日)



8 県歴 号 外

平成 8 年 7 月 31 日

各 位 殿

長野県立歴史館長

(公印省略)

時下、ますます御清祥のこととお喜び申し上げます。

このたび当館では、下記印刷物を発行しましたのでお送りいたします。

記

長野県立歴史館 夏季企画展図録 1 部

〒387

長野県更埴市屋代字清水

科野の里歴史公園内

電話 026-274-2000

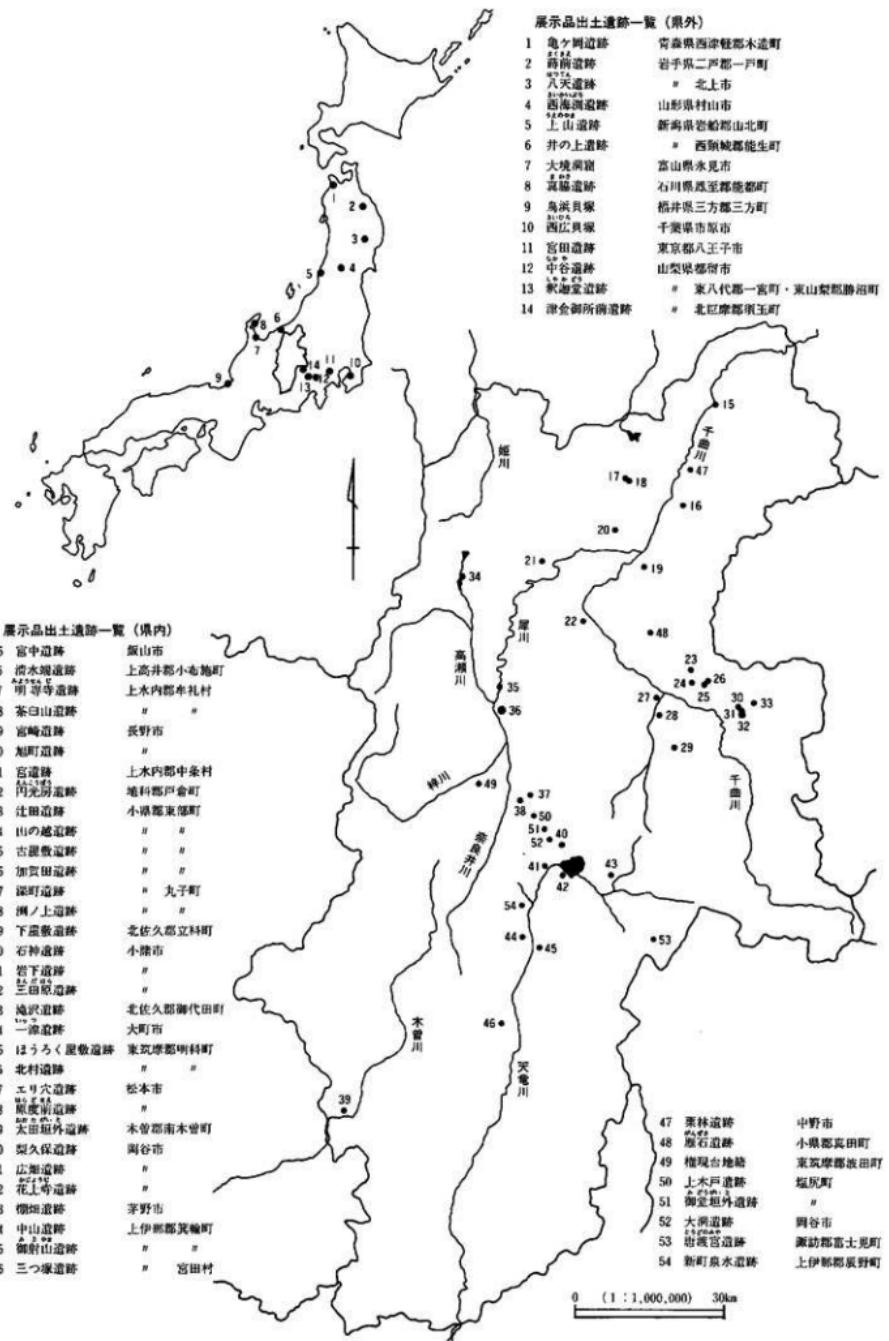
1996年 夏季企画展図録

縄文人の一生

— 北村遺跡に生きた人びと —

7月20日(土)～8月25日(日)

長野県立歴史館



展示品出土遺跡地図

「縄文人の一生—北村遺跡に生きた人びと—」開催にあたって

1987年長野自動車道建設に先立つ東筑摩郡明科町北村遺跡の発掘は、縄文文化研究史上に特記される調査になりました。遺跡は犀川の右岸の河岸段丘に立地しています。およそ1万m²の調査地区からは、縄文時代中期の終わりから後期前半（約4000～3600年前）の住居跡50軒と469基もの墓が確認され、300体にものぼる人骨が検出されました。

縄文人骨は現在までに数千体が発掘されていますが、その大部分は海岸の貝塚から出土したもので、内陸部からの多数の人骨発見は全国的に注目を集めました。北村遺跡の人骨の研究から、骨格の特徴や虫歯、けが、年齢や性別がわかり、生活習慣、埋葬姿勢と性別の関係などが解明されました。そして最新のハイテク技術により、骨に含まれる成分から植物質食料中心の食生活が明らかになりました。

北アルプスや筑摩山地に源をもつ梓川・高瀬川などの諸河川が合流して犀川となる明科町あたりは、河床からの湧水が豊かです。また8度内外の水温と清冽な水質、砂礫層が堆積する河床などの自然条件も、サケ・マスの産卵・孵化、稚魚の成育に適しています。1940年西大滝ダムが完成するまで、このあたりは信濃川水系で最大のサケの産地でした。小氷期に入る縄文後期、中央高地の縄文文化は衰退しますが、北村人はこのような環境を生かして、豊かな文化をつくっていました。縄文時代、遺跡の背後の急峻な斜面にはクリやコナラの落葉広葉樹が茂って多くの木の実が実り、シカやイノシシのすみかでもありました。今回の企画展では、誕生から死にいたるまでの縄文人の暮らしぶりを、人骨研究の成果と遺物とによって、可能な限り復原してみました。内陸の自然の資源を生かして精一杯生き抜いた縄文人たちの姿を、ぜひ想像してみてください。

1996年7月20日

長野県立歴史館長 市川 健夫



北村遺跡の調査風景



建設中の長野自動車道明科トンネル付近（手前は犀川）

目 次

展示品出土遺跡地図	3	① 祭りをおこなう広場	30
開催にあたって	3	② 装身具	31
目 次	4	③ 生殖崇拜	33
例 言	4	④ 仮 面	36
カラーグラビア	5	⑤ 祭りの道具	37
1 いのちの誕生	13	3 病と死	39
① 妊娠と出産	13	(1) 骨が語る縄文カルテ	39
② 誕生のよろこび	14	① 縄文人の傷病歴	40
③ 成長の願い	15	② 縄文人の健康白書	42
2 蓼らしと祈り	16	(2) 手厚い埋葬	43
(1) 縄文人の日常	16	① さまざまな墓	44
① 科学分析からわかる食生活	17	② 祖先への思い	45
② 狩 猶	19	寄稿	
③ 渔 労	21	縄文人はどこからきたか…馬場 悠男	46
④ 植物食料採集	22	展示資料一覧	48
⑤ 調理と食器	24	関連資料一覧	50
⑥ モノと人の動き	27	引用・参考文献	51
(2) 縄文人の祈りと祭り	29	協力者	52

例 言

- 1 本書は、長野県・長野県教育委員会・長野県立歴史館が主催し、財長野県埋蔵文化財センターの共催により、平成8年7月20日から8月25日まで開催する夏季企画展「縄文人の一生－北村遺跡に生きた人びと－」の展示解説図録である。
- 2 本書には展示構成順に展示資料およびグラフィック、参考資料を掲載した。展示資料については、巻末の「展示資料一覧」に員数、出土遺跡名、所蔵者等を記した。グラフィック、参考資料については「関連資料一覧」に所蔵者、提供者、出典等を記した。
- 3 図版キャプションには、資料名、法量、時期、出土遺跡名を記した。資料が複数の場合、いずれか1点の法量を記し、(左)、(上)などのほか、最大例を(大)と示した。
- 4 本書に掲載した展示資料の図版は原則として展示品の写真であるが、一部それとは異なるものがある。また、紙幅の都合により掲載できなかったものがある。
- 5 寄稿「縄文人はどこからきたか」は、国立科学博物館人類研究部長 馬場悠男氏にご執筆いただいた。
- 6 今回の企画展開催および本図録作成にあたっては、資料出品・資料掲載等について多くの機関ならびに個人のご協力をいただいた。巻末に芳名を記し、深く感謝の意を表す。なお、記載にあたっては資料提供者・協力者の敬称を略した。

いのちの誕生



顔面把手付深鉢形土器 高さ57.0cm 中期 山梨県津金御所前遺跡
土器の口にある内側を向く顔は母親、胸部の顔は生まれ出ようとする子どもの顔である。



出産土偶 高さ7.8cm 中期 山梨県甲斐國愛宕遺跡
しゃがんだ姿勢で、股間に産み落とされる子どもの頭が見える。



手形付土製品 長さ9.3cm 中期 山形県西海測遺跡
表面いっぱいに子どもの左手の手形が押され、裏面に母親と思われる大人の指4本が押されている。



子抱き土偶 高さ7.1cm 中期 東京都宮田遺跡



魚とりのやす(中)・説(左)・釣針(右)

(左) 長さ10.6cm 後期 千葉県
西広貝塚

やすは鹿角製で、柄に固定して手に持つたまま魚を突いてとる漁具である。説も鹿角製で、柄に固定し、柄ごと遠くに投げて魚を突いてとる道具である。右下は直釣針とよばれ、真ん中に糸を結じて、右は一般的な釣針であるが、差しがない。



植物食料採集



水さらし場（上）と貯蔵穴（左）

後期 中野市栗林遺跡

河岸段丘上を居住域、その下を水さらしなどをおこなう作業域、さらに下を木の実などの貯蔵域として聚落が形成されている。

調理と食器



木鉢 (左)長さ28.9cm 前期 福井県鳥浜貝塚
縄文時代は木工技術も進んで、土器に比べて割れにくい鉢・皿などの入れ物をつくった。材料は木ノキである。



編み籠 長さ21.0cm 前期 石川県真脇遺跡
籠のヒゴに横のヒゴを通して編みながら、モジリ編みとした籠で、この技術は現在の竹細工にも受け継がれている。



大型の鉢 最大径74.0cm 中期
小諸市鷺土遺跡
容量は90㍑も入る大きな土器である。木の実などを一時的に入れるには便利である。



玉つくりと石製装身具

玉つくりのハンマー(左上) 長さ8.3cm 晩期 大町市一津遺跡

玉の材料となった翡翠や滑石を打ち割るために、硬い石英や翡翠の礫がハンマーとして使用された。左上はベンガラが付着している。

翡翠の原石・玉・玉未製品 (大) 長さ3.6cm
晩期 大町市一津遺跡

一津遺跡では新潟県妙川氷系の翡翠原石から玉が加工されたことが明らかになった。



滑石の玉・玉未製品 (大) 長さ3.0cm 晩期
大町市一津遺跡

一津遺跡周辺の蛇紋岩地帯に産する滑石でも、多くの玉がつくられた。



琥珀の装身具 長さ4.7cm 中期 南木曾町太田垣外遺跡



翡翠の垂飾り (大) 長さ5.2cm 中期 塩尻市上木戸遺跡

海との交流



巻貝形土製品 長さ16.6cm

後期 新潟県上山遺跡

威儀性具のマルエゾボラをモデルにしたもので、全面をベンガラで赤く塗っている。



装身具

耳飾り（大）直径8.3cm

後期～晩期 松本市

エリ穴遺跡



滑石の垂飾り 高さ4.5cm 後期 御代田町
淹沢遺跡



石製の垂飾り（大）高さ6.5cm 中・後期 小諸市岩下（左）
・三田原（右）遺跡

生殖崇拜



土偶 高さ14.5cm 後期 明料町
北村遺跡

男女の文様がついた土器(下左)男性
(下右)女性 高さ20.8cm 中期
新潟県井の上遺跡

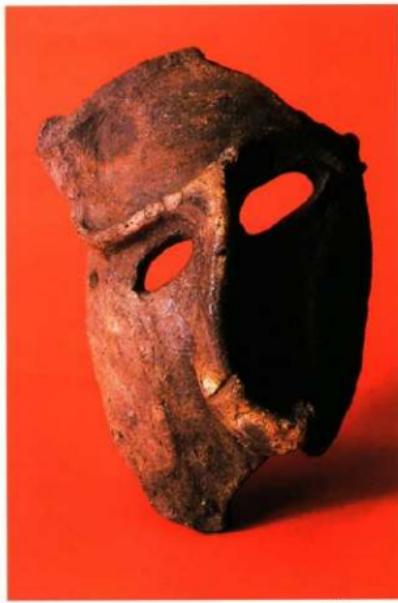
生活に欠くことのできない土器や石器にも、土偶や男女をかたどった文様をつけたり、性器を表現した形制などがみられる。



仮面の祭り



耳・鼻・口形土製品 (耳) 長さ 8cm 後期 岩手県八天遺跡
皮革や植物質の面に取りつけた組み合わせ仮面の部品である。



鼻曲り土面 複製 長さ17.7cm 晩期 岩手県芦前遺跡
鼻がよじれた異様な表情は、酒や麻薬の効果を表すといわれる。



人面付小形深鉢土器 高さ11.9cm 晩期 戸倉町円光房遺跡
後期から晩期には、手のこんだ文様や赤色で描いた車や注ぎ口のある小形土器などに、まれに人面をあらわしたものがある。堅りの場に現れるカミの神であろうか。



石棺墓群 後期 飯山市宮中遺跡

石 棺 墓



石棺墓の鉢被り葬 後期 飯山市宮中遺跡

石棺墓群のなかのひとつ。独特の浅鉢形土器をかぶせ、中から拂が出土した。頭部付近に土製スプーンが副葬されていた。



鉢被り葬の浅鉢形土器 直径30.0cm 後期 飯山市宮中遺跡



漆塗櫛 幅5.4cm 後期 飯山市
宮中遺跡

1 いのちの誕生

母体から生まれる新いいのちの誕生は、親やまわりの人びとにとって何千年・何万年という長いあいだ変わらぬ、感動や喜びであった。何千年前も昔の縄文時代はともすると野蛮なイメージでみられ、現代人とは距離をおいてみられることが多い。しかし縄文人は、母体に新しい生命が宿り、危険な出産を経る誕生の瞬間や、後産のようすを土器の文様や絵画として残している。こうした出産場面の表現は世界的にみられる。やがて幼いいのちが無事育つように願った家族の思いは、最初の歩行を始める一歳ぐらいの子どもの手形・足形として残っている。さらに成長して大人の仲間入りを果たすときには、拔歯がおこなわれた。このように、縄文人の通過儀礼のようすを遺跡から発掘された遺物から知ることができる。縄文人のいのちの誕生や成長過程を、具体的な遺物を通して浮き彫りにしてみたい。

① 妊娠と出産

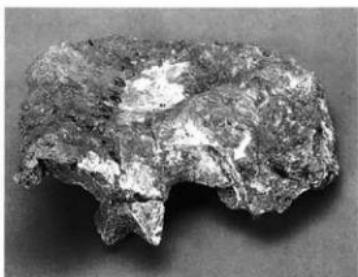
新いいのちの授かりは、母親のお腹の大きな張り出しで知ることができる。縄文時代には土偶とよばれる土でつくられた人形がある。土偶には乳房、大きな尻、妊娠線などが表現されていることから、大半は女性をかたどったものである。出産時には死にもつながる大きな危険をともなったために、土偶にも無事な出産が託されたことであろう。母体から子どもが生まれ出る瞬間を表現した土偶や、ひとつの土器の母親と生まれ出る子どもの表現には、無事な出産の願いや安堵感をみることができる。



妊娠土偶 高さ19.5cm 晩期 青森県竜ヶ岡遺跡

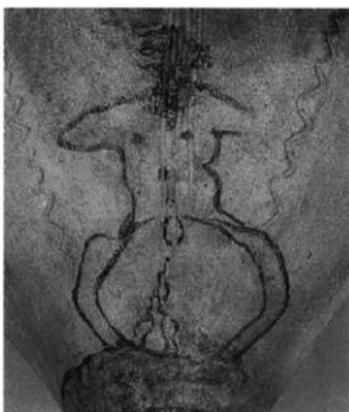


妊娠土偶 高さ6.0cm 中期 岡谷市広畑遺跡



出産痕が残る骨盤 明科町北村遺跡

女性が子供を産むたびに、骨盤の内側にえぐれたような傷ができる。この傷の深さによって何人出産したかがわかる。



出産絵のある土器 模製 高さ64.0cm 中期

富士見町唐澤宮遺跡

屋外理處にもちいた大型深鉢の胸に、立って両足をふんばる女性が墨で描かれ、股間にには後産の胎盤のようないわものが落としている。縄文時代の出産を描く唯一の絵画である。

② 誕生のよろこび

小さいのちはか弱く、親の庇護なくしては一日たりとも生きてはゆけない。そんな赤子に限りない愛情をそそぐ親の姿は、いつの時代でも変わらない。足を投げ出して子どもを腕の中に包むように抱きかかえる王偶の姿は、今の母親と同じである。後産の胎盤も縄文人は大事に土器に入れて埋めていた。家の出入り口にエナ（胎盤）を埋める風習は最近までみられた。エナが踏みつけられるほど、その子は丈夫に育つという伝承が残っている。



埋甕 高さ26.1cm 中期 小諸市
三田原遺跡

うめがい
埋甕 (左) 高さ35.1cm 中期 小諸市三田原遺跡

まへ だい
底を抜いた深鉢形土器を住居の出入り口に正面または逆さまに埋める。



軽石製石鉢 長さ49.0cm 後期 小諸市
三田原遺跡



東信地方では理窓の位置に、軽石でつくった実用品ではない石鉢を埋めることがある。 軽石製石鉢 長径33.5cm 後期 小諸市岩下遺跡



軽石製石鉢 長径39.0cm 後期
小諸市三田原遺跡



埋めた住居 中期 小諸市三田原遺跡

壁穴住居の出入り口に、底を抜いた深体形土器2個を連さまに埋めている。



石鉢を埋めた住居 後期 小諸市三田原遺跡

石を敷きつめた柄鏡形の住居の出入り口部分とがの間に、軽石製の石鉢を埋めている。

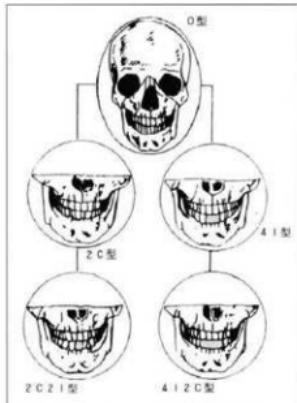
③ 成長の願い

現代のような医者や医療の存在しない縄文時代は、乳幼児の死亡率の高さは際立っていた。それだけに子どもの成長は周囲のものに大きな喜びをもたらした。粘土板に残された1歳前後の縄文の子どもの手形や足形は今も同じで、時間のへだたりを忘れさせる。15~16歳の頃になって大人の仲間入りをしたことは、拔歯で知ることができる。歯を抜く痛さに耐えることによって、成人として認められたのである。そして拔歯される歯の位置から、その個人の出身を探ろうとする研究もある。



抜歯された頭蓋骨 晩期 中条村宮遺跡

壮年男性と推定される頭蓋骨。上顎2本、下顎3本を抜歯され、右図の2C型に属す。



縄文人の抜歯 (国立歴史
民俗博物館1985より)

抜歯とは健康な歯を、成人、結婚、近親者の死などのおりに抜くことである。縄文晩期の愛知県以西では上顎の大歯を抜くことから始まり、下顎の大歯または切歎を抜く。

2 暮らしと祈り

縄文時代は狩猟・漁労・植物採集を基盤とする社会である。縄文人の活動の中心となった最小の単位は現在と同じような単婚家族を受け入れる家・住居であった。いくつかの家が集まって集落を形成し、ムラの中には祭りの場や墓域が含まれていた。さらにその外側には食料獲得の場や広域で物資を入手する行動領域が広がっていた。

米作りも鉄も知らなかった縄文人は、森や川、湖、海という自然の中で生きながら、自然に学び、自然を巧みに利用して、石・角・骨・木・樹皮・植物纖維・皮革・粘土などの素材を生かしながら、多種多様な縄文文化を彩る道具づくりの技術を発達させ、さまざまな道具を発明した。

また自然の中にカミをも見出した縄文人は、豊饒への祈りや感謝の儀礼、さらに人の誕生、成人、死者に対する通儀礼や祭りなども盛んに行なった。それは石を敷き詰めた敷石造構や石棒、石剣、独钻石、御物石器などの直接生産活動にかかわらない石器が、後期以降に大量に使用されたことによって知ることができる。

こうした儀礼や祭りは縄文時代の社会や経済活動を活性化させ、補完していた。自然への絶対の信頼をおいた狩猟採集活動は、狩猟での協業、植物採集での分業、あるいは分配などを導き、戦争のない平和な縄文社会を形成していったのである。

(1) 縄文人の日常

縄文人が時間の流れを最も意識したのは昼と夜の交替、すなわち1日であった。アフリカのブッシュマンの男は3~5日の割に狩猟に出かけ、1回の狩猟に5~12時間を費やし、女はほとんど毎日植物採集に出て、1日の労働時間は1~数時間であるという。縄文人も食料獲得のための時間を最小限にして、残りの時間を道具の材料を得たり、石器、土器、木器、籠などの道具づくり、あるいは共同の祭り場づくりなどに費やした。

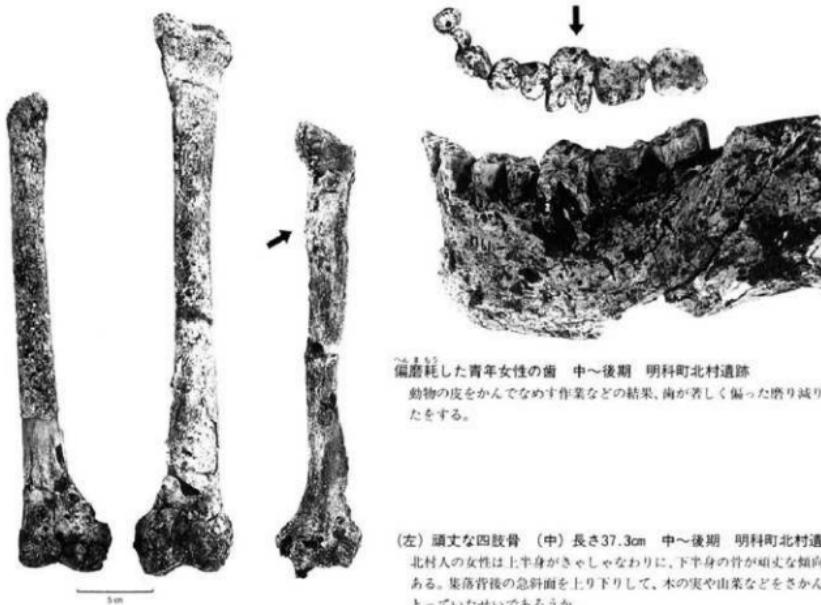
八ヶ岳山麓のような山の中腹に位置する縄文ムラでは、尾根や山を上り下りすることによって、季節の変化に対応することができたのである。つまり、春の幸を先取りしたければ山を下り、秋の恵みを早く得るには山に上り、秋の深まりとともに山を下れば、秋の収穫物を長い間確保することができたのである。



外耳道骨腫のある頭蓋骨 中～後期 明科町
北村遺跡

海女のように、日常的に潜水活動を続いている人に現れる病気といわれる。

北村人の熟年男性顔面の復原 高さ20.0cm 後期 明科町北村遺跡



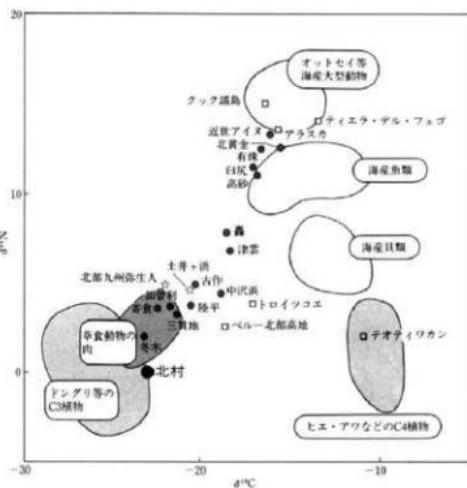
偏磨耗した青年女性の歯 中～後期 明科町北村遺跡

動物の皮をかんでなめす作業などの結果、歯が若しく偏った磨り減りいたをする。

(左) 頭丈な四肢骨 (中) 長さ37.3cm 中～後期 明科町北村遺跡
北村人の女性は上半身がきしゃなわりに、下半身の骨が頭丈な頸向がある。集落背後の急斜面を上り下りして、木の実や山菜などをさかんにとっていたせいであろうか。

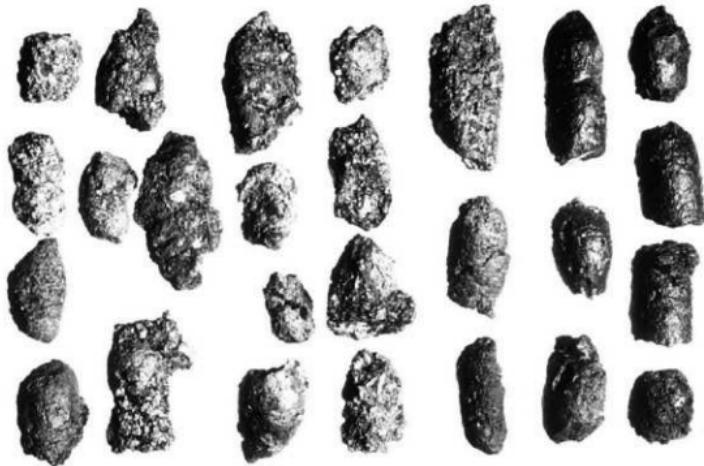
① 科学分析からわかる食生活

動植物に含まれる油(脂肪)^{しづう}の化学組成を調べる脂肪酸分析によって、縄文クッキーやウンコの化石(糞石)^{ふんせき}などの成分が解明されつつある。山形県押出遺跡出土の縄文クッキーはクリ・クルミを砕き、肉・骨骼などを混ぜ、つなぎに血と卵を使い、野性の酵母^{こうじ}を加えてよく練り、200~250度で焼き上げたことがわかった。石川県真脇遺跡出土の土器片にはイルカ・シカの油脂が残り、土器でこれらの肉を煮たり、貯蔵していた。宮城県里浜貝塚の糞石の脂肪酸分析では、シカ・イノシシ・マガモなどの鳥獣、オットセイなどの海獣、マダイ・アサリなどの魚介類、ヒジキなどの海藻、トチ・クリ・クルミなどの木の実を食べてていたことがわかった。さらに、明科町北村遺跡では人骨に含まれるたんぱく質(collagen)分析によって、木の実が主要な食料であったことが明らかにされた。



先史人集団の利用食物の同位体組成(南川雅男1995より)

人骨に含まれるたんぱく質(collagen)分析によって、北村人が木の実を主要な食料にしていたことが明らかにされた。



化石化したウンコ（糞石） 前期 福井県鳥浜貝塚

人やイヌのウンコが石灰分などを含んで化石化したもので、糞石とよばれる。ここに含まれる油（脂肪）から、消化された縄文人の食料がわかる。

② 狩 猎

縄文時代の生業のなかで、中期を除いて大きなウェイトを占めていたのが狩猟であった。弓矢の先につける石鏃、弓や弦をかける弓管、槍先などの狩猟具が多い。また、狩猟の実際の場面を描いた狩猟文土器や線刻絵画などもある。早期には落とし穴が多用され、動物の生態を利用して捕獲するシカ笛、ワラダ（鷹の羽音をまねてノウサギを捕獲する投げ具）なども使用された。また、獵犬として活躍したイヌは死後も人間と同じように手厚く埋葬された。狩猟法ではシカ・イノシシなどは集団による巻き狩りが行われ、狩猟の名人を象徴するかのように多数の石鏃を副葬した狩人の墓もみられる。



シカ笛 幅6.4cm 後期 長崎県
佐賀貝塚



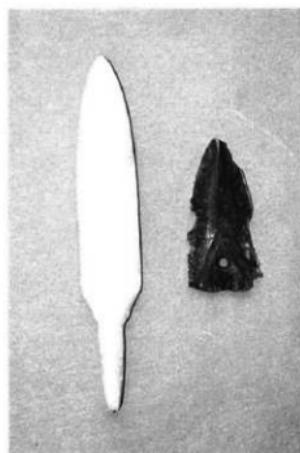
ワラダ 長径30.0cm 後期 秋田県中山遺跡



狩猟文土器 高さ26.0cm 後期 青森
県三内遺跡



石の矢じり (石箇) (右下) 長さ3.2cm 中～後期 明科町北村遺跡



骨(左)と牙(右)の矢じり (左)8.8cm
後期 小諸市石神遺跡



弓 長さ120.0cm 前期
福井県鳥浜貝塚

弓箭 長さ6.0cm 晩期 長野市宮崎遺跡
鹿角製で弓の末端に取りつける。弓の弦を巻きつけ、大きな力が加わるために、硬い鹿角が使用された。



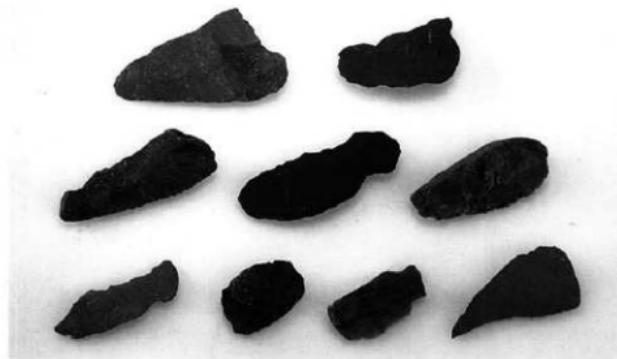
矢じりの刺さったシカの骨
後期 静岡県駿河郡遺跡



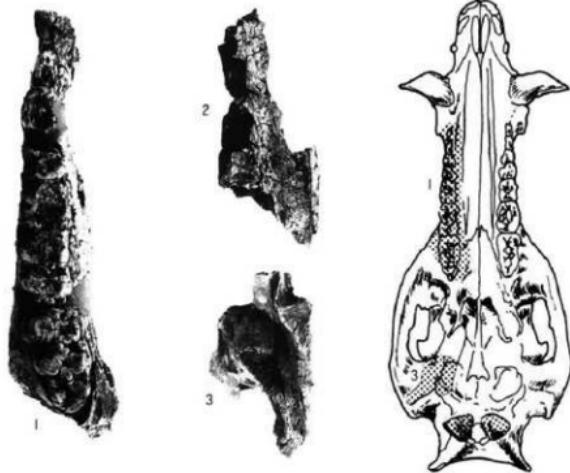
狩獵文土器 高さ20.4cm 後期 岩手県
馬立II遺跡



埋葬されたイヌ 後期 宮城県田柄貝塚



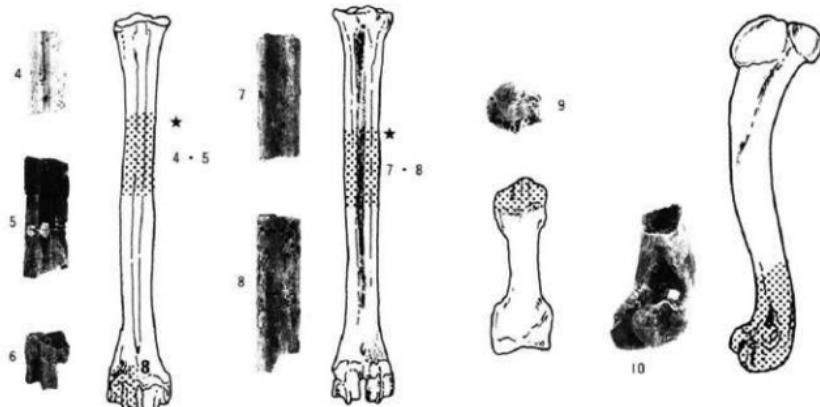
動物解体具（スクレイバー）
 (左上) 長さ10.3cm 中～後期
 明科町北村遺跡



食料にされた動物
 1～3 イノシシの骨 (1)
 長さ14.2cm

4～8 シカの骨 (8) 長さ5.2cm
 9 クマの骨 (9) 長さ1.5cm
 10 タヌキの骨 (10) 長さ4.8cm
 中～後期 明科町北村遺跡

縄文時代にもっとも捕獲された動物はシカ・イノシシで、ほかにツキノワグマ・タヌキなどがある。

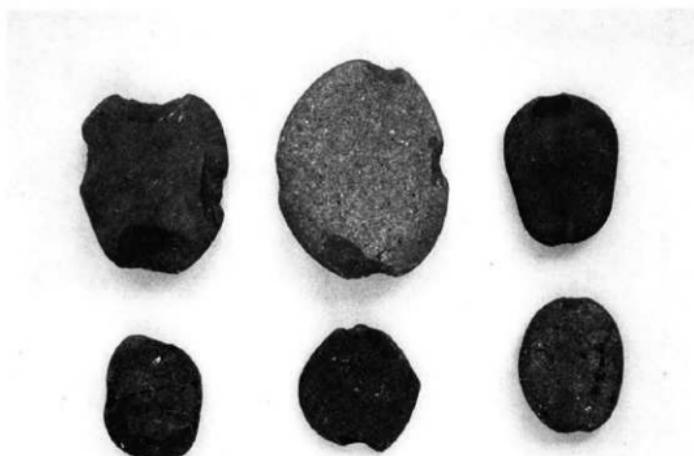


③ 渔 労

绳文人は海岸部の貝塚にみられるように、外洋のマグロまで捕獲するような活発な漁労活動を展開していた。海に比べれば資源の少ない内陸部の河川や湖でもコイ・フナ、イワナ・ヤマメなどの魚類、カラスガイ・カワシンジュガイなどの淡水産貝類をとり、夏から秋にかけて千曲川などに潮上してきた大量のサケ・マスも、捕獲して煙製にすれば冬季間の重要な食料となつた。北相木村柄原岩陰遺跡の釣針とサケ科の背骨、宮崎遺跡の石、石や土器片を用いた漁網錐、軽石製の浮子などの漁労具、さらに飯山市山の神遺跡の魚を描いた土器などが、绳文時代の具体的な漁労のようすを伝えている。



漁網のおもり(土器片錐) (大)長さ5.5cm 中期 岡谷市花上寺遺跡 漁網のおもり(石錐) (大)長さ3.4cm 後期 岡谷市花上寺遺跡
割れた土器片を再加工して、網のおもりにしたものである。



漁網のおもり(石錐) (大)長さ12.0cm 後期 長野市村東山手遺跡
小さな偏平の河原石の末端を打ち削ったり、板状の石を撃り切ってから、切り目を入れ、網のおもりにした。村東山手遺跡のものは大型で、千曲川で用いたのであろうか。

④ 植物食料採集

地球上の低緯度地帯に住むブッシュマンなどの狩猟採集民の食料は、7割以上が植物性である。縄文時代は打製石斧のようにヤマノイモやクズ・ワラビの根などを掘りとる石器、採集してきた植物や木の実を砕き、つぶし、たたく、石皿・磨石・凹石などの加工工具が多い。縄文前期と中期の石器組成を比較すると、前期は石鎌などの狩猟具のウェイトが高いが、中期になると打製石斧や石皿・磨石などの植物採集や加工用の石器が狩猟用石器を上まわることから、中期縄文人は高度な植物利用を発達させた落葉広葉樹の森に住む菜食民といえる。



土掘り具（打製石斧）（左下）長さ18.3cm 中～後期 明科町北村遺跡



脚のついた石皿 長さ40.0cm 後期 中野市栗林遺跡
木の実やワラビの根などをたたきつぶしたり、粉にする道具で、すわりがよいように脚がついている。



跡のついた石皿 長さ29.0cm 後期 小諸市三田原遺跡
安山岩を敲打して、磨り面と跡の突起をつくりだしている。



貯蔵されていたクルミ 後期 中野市栗林遺跡

殺虫や鮮度を保つために湿地につくられた貯蔵穴に入っていたオニグルミの実である。



水さらし場 後期 中野市栗林遺跡

パングリなどのアク抜きをする施設で、トチのアクであるサボニンは灰汁につけないと抜けない。



石皿と磨石のつかいかた



石皿 (左) 長さ40.8cm 後期 明科町北村遺跡



凹石・磨石 (右下) 長さ11.4cm 中～後期 明科町北村遺跡

石皿の上で木の実をたたきつぶしたり、磨って粉にする道具。



凹石のつかいかた

⑤ 調理と食器

縄文土器は出現当初から黒いススが付着しており、モノを入れる容器としてではなく、煮る道具として登場してきた。食料を煮て食することは、栄養摂取はもとより、煮なければ食べられない植物質食料の拡大に大きな役割を果たした。

植物はたたいてつぶすこと、細胞壁を壊し、水分やビタミン類などを浸出させることができた。水さらしや灰汁につけるアク抜きは、成分のうちの有用なものとアク（タンニン・サボニン）を分離する技術である。縄文クッキーなどのように発酵、加熱した保存の効く加工食品もあり、複数の食材を組み合わせる（混ぜる、和える）ことによってさまざまな風味や口あたりをもった多彩な料理をつくっていた。こうしたことから、縄文人はなんに食物を摂取するだけではなく、食事を豊かにして楽しんでいたことも理解される。



煮炊きにつかった土器（右後）高さ22.0cm 後期 小諸市岩下遺跡

深鉢とよばれる土器で、主に煮炊きに使用された。水や木の実などを入れる容器としてもつかわれた。文様で飾られた少数の小型品は祭りに、文様の簡素な多数の大型品は日常につかわれたのだろうか。右端は蓋り付け用の浅鉢。



煮炊きにつかった土器 高さ52.8cm 後期
明科町北村遺跡



煮炊きにつかった土器 高さ63.6cm 後期 明科町
北村遺跡



煮炊きにつかった土器 高さ20.4cm 後期 明科町
北村遺跡



煮炊きにつかった土器 高さ20.6cm 後期 塩尻市御堂坂外遺跡



盛り付けにつかった土器 高さ20.4cm 後期 明科町
北村遺跡



盛り付けにつかった土器 現存高20.0cm 後期 明科町
北村遺跡



盛り付けにつかった土器 高さ11.9cm 後期 明科町北村遺跡



盛り付けにつかった土器 口径28.0cm 後期 明科町北村遺跡



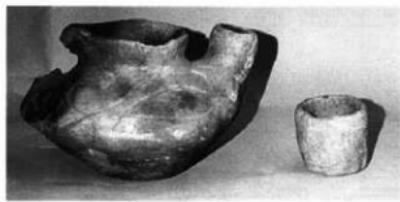
台のついた土器 高さ20.0cm 後期 東部町
古戻敷遺跡



壺形土器 高さ32.3cm 後期 明科町
北村遺跡

盛り付けにつかった土器

浅鉢とよばれる土器で、食べ物を盛り付けたり、なかには転用されて遺体の頭部に被せた例もある。台のついた高杯状の土器や壺形土器はめずらしい。祭りのときに使用されたのだろうか。



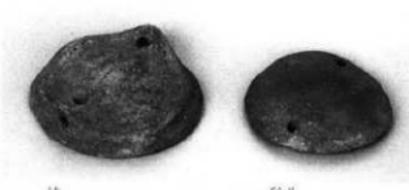
液体を注ぐ土器・杯 高さ8.0cm 後期 東部町加賀田遺跡
注口土器とよばれ、水・湯あるいは酒などを入れて注いだ。加賀田遺跡では住居跡の中で二つが接近して出土した。



液体を注ぐ土器 (左) 高さ8.1cm 後期 中野市栗林遺跡



容器の蓋 (中) 径8.1cm 後期 明科町北村遺跡



容器の蓋 (左) 径6.7cm 後期 小諸市郷土遺跡
縄文時代にも木や編み物の蓋はあったと思われるが、粘土を焼いた土製の蓋も注口土器や壺に使用された。



粘土でつくったスプーン (左上) 長さ6.8cm 後期 明科町
北村遺跡



粘土でつくったスプーン
長さ12.4cm 後期 東部町
辻田遺跡
縄文時代には木製の大きな
スプーンがあるが、粘土で焼
いた小型の土製スプーンも
つかわれていた。



漆塗りの木皿 長さ35.4cm 前期 福井県鳥浜貝塚

木の盤の表面をみがき、その上に赤漆を塗っている。漆は木器のほか玉器、骨などにも使用され、接着剤としても用いられた。



しゃもじ形木製品 長さ18.5cm
前期 福井県鳥浜貝塚

⑥ モノと人の動き

最近、長門町星賀^{ほしが}で大規模な黒曜石の採掘跡が発見された。また、和田岬などの原産地から100kmも離れた群馬県昭和村糸井宮前遺跡では、最大2kgもある黒曜石の原石が100点以上も発掘され、「黒曜石分配センター」ともいべき遺跡を中継基地として、周辺の遺跡に再分配していたことが明らかになりつつある。黒曜石・翡翠・琥珀・アスファルトなどの交流には、距離的に離れた地域間で、物資や情報、知識や技術、それを伝える人間の動きがあった。これらの物資の交流には直接採集や直接交換、あるいは間接交換や再分配などの方法があり、その背後にある集団や社会のあり方が問題になりつつある。



磨製石斧（大）長さ12.7cm 中～後期 明科町北村遺跡
蛇紋岩などの石材が手に入れやすい、特定の道筋で生産されているらしい。

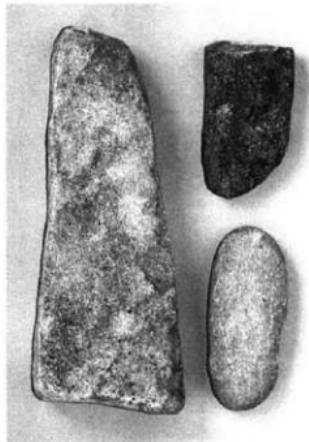


石斧の柄 装着部の長さ24.0cm 前期 福井県島浜貝塚
石斧を使うには木の幹と枝の部分を木取りした柄が必要だった。まさかのよ
うな櫛斧用と、ちょうどこのような横斧用の区別がある。



黒曜石の塊 前期 岡谷市大洞遺跡

加工されていない7個の黒曜石塊が積み上げた状態で出土し、最小が305g、最大が790gで、総重量は2,740gであった。この遺跡で使用されてい
るほかに、ここから他の遺跡に再分配されようとしたのかもしれない。



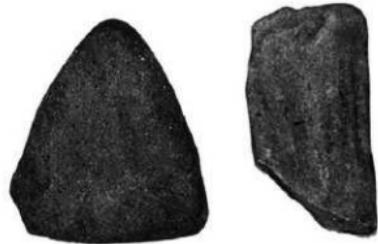
砥石（左）長さ20.5cm 後期 小諸市岩下・
三田原遺跡

砥石には置砥として磨製石斧をみがく大型の柱状
砥石、手持ち砥として骨角器などをみがく小型の
有溝砥石などがある。



磨製石斧の再利用品（右）長さ5.5cm 中期
小諸市郷土遺跡

破損した磨製石斧を小型のノミ状の石器に再利用する
ために、余分な部分を振り切り技法によって切断しようとしている。



玉延石（右）長さ18.0cm 晩期 大町市一津遺跡
粗削りした玉をみがいて仕上げる砥石のために、溝がついている。



貝翠の重飾りの出土状態 中期 塩尻市上木戸遺跡
ひとつの墓に5個の貝翠玉が副葬されていたもので、被葬者のムラの中での立場を暗示している。



タカラガイ形土製品 長さ7.1cm 中期 長野市旭町遺跡
暖帶性の貝を代表するもので、タカラガイの実物を模において粘土でまねたものであろう。



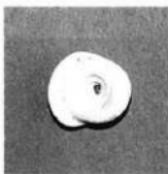
現生のタカラガイ



ハマグリ 幅5.0cm 後期 小諸市石神遺跡
ハマグリは刃をつけて道具として使用された。



サメの背骨でつくった耳飾り
径2.3cm 後期 長野市宮崎遺跡
遠い海から運ばれた珍しいサメの背骨に、ベンガラを塗って赤い色をつけ、耳飾りにしたものである。



イモガイ 径1.7cm 後期？
小諸市石神遺跡
装飾品に加工されたイモガイは紀伊半島以南の暖帶性の海産貝である。

日常生活に必要な産地の限定された資源のほか、海岸地方との交流を物語る品じなが出土している。

(2) 縄文人の祈りと祭り

縄文人は、ムラに暮らす人びとの集う広場を設けて、誕生から死に至るまでの成長の節目にさまざまな祭りをおこなった。また、狩猟や移動など日常生活の折おりにも、豊饒への祈りや感謝、安全を祈った。

仮面や装身具は、ハレの日の装束ともなり、ムラに秩序を与え集団のきずなを深めるための祭りを効果的に彩った。また、土偶や石棒には、子孫の繁栄や豊かな食料採集への祈りが託された。三角柱状土製品、石冠や御物石器のように、悠久の時間を経て、現代ではすでに用途がわからない道具も数多い。

大自然のふところで生きた縄文人たちは、こうした道具に支えられて、周囲の環境から受ける幾多の試練に立ち向かい、日々の暮らしをわずかでも快適に過ごす術を得ていたのだろう。



土偶付土版 複製 高さ15.8cm 晩期 松本市エリ穴遺跡（表）

（裏）

この土版は二つに割れて重なった状態で出土した。片面には土偶と同じ女性像、もう一方には土器と同じ文様が描かれ、赤く塗られている。

粘土を焼き上げてつくった土版と、砂岩や凝灰岩を利用した岩版は、裏表に精巧な文様が刻まれていた。エリ穴遺跡の上版は、片面に女性の全身像が表現され、土偶との性格の関連性がうかがわれる。いっぽう小布施町清水端遺跡の土版には穴があけられているが、護符として身につけたのかもしれない。

① 祭りをおこなう広場

小諸市岩下遺跡は、縄文時代後期の住居 3軒と広場、墓から成り立っている。

大型の柄鏡形敷石住居からのびた張り出し部は、左右にトーテムポール状の木柱を立てて、斜面を削って平坦に造成された円形広場へとつながっている。住居と広場の間には、石垣状に積み上げた石列が弧状に広がり、ところどころに石組みの石棺墓がみえる。



小諸市岩下遺跡全景 後期



岩下遺跡の景観復原画
(小山内玲子画)

石棺墓への埋葬の光景を復原した。左下の敷石住居は建築中で、床の一部に板を敷いてある。

② 装身具

ハレの日の装束に、装身具は欠かせない。しかし、縄文人にとって装身具は、装うためだけの道具ではなく、社会のなかの地位を表徴する手段でもあった。かれらは、狩獵や採集で得た身近な素材とともに、ときには交易で手に入れた貴重な貝や石などで、さまざまな装身具を生み出した。

ベンガラで赤色に彩られた耳飾りの中には、白形をした耳柱や透かし彫りの技法を駆使した耳環までさまざまである。頭には髪飾り、手足には腕輪や足環、胸には翡翠や滑石からつくった垂飾り（ペンダント）を下げていた。土偶の顔には、入れ墨が表現されているものもある。



耳飾り（中）直径4.4cm 後期 中野市栗林遺跡



土製の装身具（大）長さ6.2cm 後期 中野市栗林遺跡

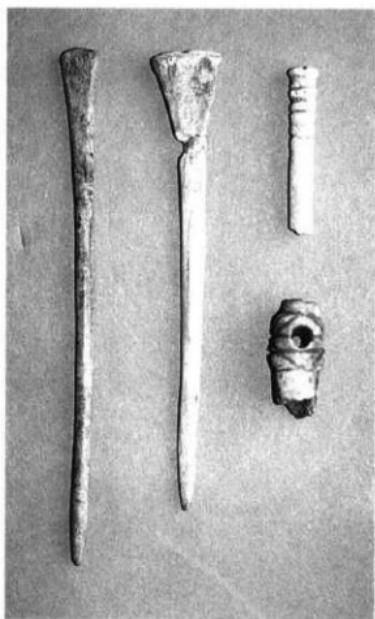
耳飾りは、ピアスのように耳たぶに穴をあけて装着した。直径1cmに満たないものから10cm大の大型品へ、成長にしたがって徐々につけかえていったのである。ただ、下高井郡野沢温泉村岡ノ峯遺跡の石棺墓出土の耳飾りのように、二個一对で発見されるのは珍しい。



耳飾りをした土偶 高さ22.8cm 晩期 山梨県
中谷遺跡



斧形の垂飾り 長さ6.3cm 後期 牟礼村
明尊寺遺跡



骨製の装飾り (左)長さ10.6cm 後期 小諸市石神遺跡
シカの骨を細く削って先端をとがらせた。ヘアピンである。
右2点は頭部に細かい彫刻をほどこし、赤色に塗っている。



牙製の装身具をつけた人骨 後期 明科町北村遺跡
働き盛りの男性が身につけた胸飾りと腕輪は、イノシシ
の牙でつくられている。ムラを統率していた人物だろうか。



土製の腕輪 (中) 長径10.4cm 中期 丸子町洞ノ上遺跡
二枚貝でつくった貝輪を模倣しているのだろう。このような遺物から、貝輪がもたらされていた可能性も多い。

③ 生殖崇拜

日常の生活が、ムラびとの協業で成り立っていた縄文社会では、集団の成員一人ひとりが貴重な労働力だった。かれらは、より多くの子供をもうけて人口を維持するため、性の営みを尊重した。また、妊娠とともに腹部がせり出し、やがて苦しみ悶えながら新たな命を生み出す姿は、普段と違う女性の一面を見せつけられることにもなり畏怖された。男根を象徴した石棒や妊娠状態を表した土偶など、縄文時代には、社会の繁栄を祈る人びとの切実な願いが伝わってくる品が多い。



祭りの場（上）と土偶（下左）・石棒（下右）の出土状態 後期 明科町北村遺跡

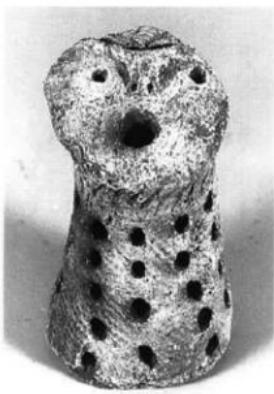
ムラはそれにつくられた二つの集石の、一方には土偶が、他方には細身の石棒が埋納されていた。この場所で、子孫繁栄への祈りが捧げられたのであろうか。



土偶（大）高さ14.5cm 後期 明科町北村遺跡



石棒（左）長さ30.0cm 後期 明科町北村遺跡



筒型の土偶 高さ9.5cm 後期 東部町
古屋敷遺跡



土偶 複製 高さ20.1cm 後期 淀野町新町泉水遺跡



(左) 土偶 複製 高さ26.7cm
中期 中川村苅谷原遺跡
(右) 土偶 複製 高さ17.5cm
中期 波田町葦原遺跡



(左) 土偶 複製 高さ
25.0cm 後期 松本市
女鳥羽川遺跡

(右) 土偶 高さ5.4cm
晩期 同谷市中島A遺跡



妊娠女性をかたどった土偶は、中期以降爆発的に増加し、地域や時期によっていろいろな形態を生み出した。後期には仮面をかぶった姿を表現した土偶もあらわれる。

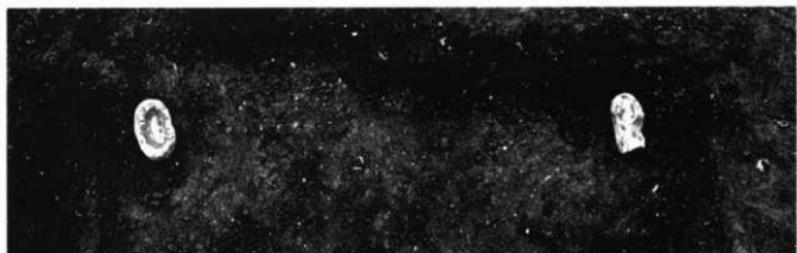


大型石棒の出土状態 長さ110.0cm 後期 明科町
ほうろく屋敷遺跡

(右) 石剣 長さ40.8cm 晩期 宮田村三つ塚遺跡

(左) 大型石棒 長さ95.0cm 中期 富山県大洞窟

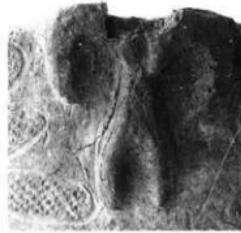
石棒は長いものでは1mを超える、住居の垣端や祭壇あるいは屋外に立てられる太形のものと、長さ50cm、太さ5cm以下の細形がある。どちらにも頭部に彫刻を施した精巧なものがあるが、細い方はやがて扁平な剣や刀形の儀器に転じている



男模状土製品(右)と石皿状土製品(左) (右)長さ5.0cm (左)縦5.0cm 中期 茅野市棚畠遺跡



男性を表すみずく土偶



女性を表す山形土偶

(左) 土偶のついた土器 口径14.3cm 後期
埼玉県馬場小室山遺跡

④ 仮面

祭りでは、ときに仮面をつけてカミにふんした人物が登場する。波田町から出土した仮面は、あどけない表情をしているが、岩手県奥前遺跡例は鼻が左によじれて、苦しそうな表情を浮かべている。耳・鼻・口形土製品は、木または革製の面に取りつけたのだろう。



仮面形土製品 縦3.2cm 晩期 長野市宮崎遺跡
人の顔よりずいぶん小さい。眉・鼻を一本の粘土ひもで表し、目と口をあけている。赤色が塗られている。

土製の仮面 複製 縦15.6cm 後期 波田町権現台地蔵



岩面 縦11.8cm 晩期 立科町下屋敷遺跡

砂岩を彫刻して顔面を表現した完形品である。裏面は平らで、顔から太い穴が斜め下に向かって通じている。鼻の両脇にひげを表すような彫刻が施されている。



耳形土製品 縦7.7cm 後期 御代田町津沢遺跡

カラーグラビア7の耳・鼻・口形土製品にはひもでしばって固定する穴があるが、これにはない。裏面は丸みをもってふくらんでいる。

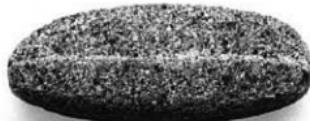
⑤ 祭りの道具

三角柱状土製品は、貫通する穴があくものとあかないものがある。いっぽう石冠は、左右対称形が一般的で、頭部が石斧の刃もしくは亀頭状に加工されている。どちらも、底面があることは共通する。またスタンプ形土製品は、底面のみに文様があり、文字どおりハンコに似ている。しかし、これらの道具については、いまだに用途が確定できない。

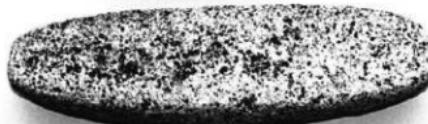


三角柱状土製品 長さ10.0cm 中期 丸子町深町遺跡

三角柱状土製品 長さ8.0cm 中期 小諸市郷土遺跡



石冠 長さ13.5cm 晩期 松本市原度前遺跡



石冠（下）長さ23.0cm 晩期 牟礼村茶臼山遺跡



（上面）



（下面）

土版 長さ10.3cm 晩期 小布施町清水端遺跡

スタンプ形土製品 長さ7.5cm 後期 明科町
ほうろく屋敷遺跡



土鈴 (左) 直径3.5cm 中期 小諸市郷土遺跡



土偶形土鈴 高さ4.5cm 中期
箕輪町中山遺跡



(左) 土笛 幅7.2
cm 中期 箕輪町
御射山遺跡

(右) 亀形土製品
複製 長さ9.5cm
晩期 真田町瀬石
遺跡



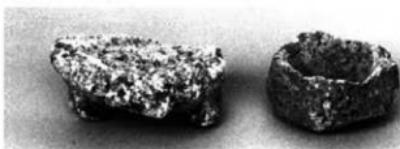
粘土を焼き上げた笛や鈴は、素朴な音色を響かせる。祭りの場面などで、音の演出具として重要な役割を果たしたことであろう。中期につくられた樽形の有孔鉢付土器は、口に革を張って太鼓に用いたという説もある。



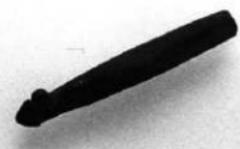
ミニチュア土器 (左上) 高さ8.2cm 中～後期 明科町北村遺跡



ミニチュア注口土器 高さ6.4cm
後期 小諸市石神遺跡



ミニチュア土器 (左) 幅6.3cm 中～後期 小諸市郷土遺跡



ミニチュア石剣
長さ4.8cm 後期
小諸市岩下遺跡

ミニチュア土器は通常の土器をただ縮小しただけではなく、それぞれが独自の個性を持っている。子どものおもちゃや死者への副葬品など、用途については諸説がある。ミニチュア土器を手にして、祭りの宴でふるまわれる酒をくみかわしている縄文人を思い描いてみるのも悪くない。

3 病と死

縄文人骨の科学的な分析は、かれらの体型や性別はもちろんのこと、病気やけが、寿命、食生活、労働や運動、生活習慣など、いろいろな情報を与えてくれる。「豊かな縄文人像」をよそに、北村人たちは過酷な自然環境のもとでの生活を余儀なくされていたらし。しかしいっぽうで、貝塚で発見される海岸部の縄文人や農耕生活をはじめた弥生人と比べると、意外にも傷病の痕跡は少ない。それにはおそらく、食生活や生業形態、それを取り巻く社会環境の違いなど、いくつかの要因が関係しているのだろう。

やがて死を迎えた仲間に對して、かれらは墓穴を用意した。埋葬の実施は、死者をあの世へ送るという意識のきわめて具体的なあらわれである。墓の上には、墓標代わりの石がおかれ、ときにはさまざまな道具がそえられた。それぞれの墓相互は、この世でのあいだがらを映すかのように、共通点があるものも少なくない。こうしてムラの一画に集中した墓域は、同時にかれらの祖先たちを崇拜する聖域ともなった。



配石遺構 後期 伊那市首駄刈遺跡

右をもちいたさまざまな遺構は、縄文にとって整りの場であるとともに、しばしば墓地と結びついて、葬送儀礼の場となったり、祖霊をまつる聖域となっていた。

(1) 骨が語る縄文カルテ

これまで海岸部で発見してきた縄文人の場合、寿命は25年とされている。これは新たなる命を得た100人の赤ちゃんが、成人に達してまもなく半減してしまったことを意味する。いっぽう北村人は、遺骨の残りが悪い乳幼児を発見することができなかったとはいえ、寿命は34.5歳と高い。なかには、60歳を過ぎてなお余命を保っていた人もいたようだ。植物質食料に比重をおいた、コレステロールの低い食生活が一因だったのかもしれない。

① 縄文人の傷病歴

死者の骨や歯には、その人が生前経験してきたさまざまな履歴が刻まれることも少なくない。歯の表面をおおうエナメル質に刻まれた溝は、成長期の栄養障害など、肉体的なストレスを物語る。まれには、手足の骨に成長遅滞を示すハリス線とよばれる痕跡が残る場合もある。また、現代の三大成人病のひとつといわれるガン、腰痛の原因となる脊椎の棘状突起や骨粗鬆症など、骨に影響を及ぼす傷病もいくつか発見されている。さらに、女性の骨盤についたわずかな傷跡から、出産経験の有無も判定できる。いずれは一人の女性が産んだ子供の数が推定でき、縄文社会の人口について精度の高い成果が得られる時がくるだろう。



埋葬された少年 推定身長103.0cm 中～後期 明科町北村遺跡

下顎の第一臼歯がはえていることから、享年6歳と推定される。腕をまっすぐに伸ばし手のひらを下向きに、脚はひざを立てて埋葬されていた。左の腰のあたりから、装身具であろうか、イノシシの牙が出土している。すぐ東に接して、この子より先に亡くなった50歳代の女性が葬られている。母親だろうか。



（左）青年男性骨 推定身長162.3cm

中期 明科町北村遺跡
太く頑丈な骨骼である。上顎の歯のはほとんどにエナメル質減形成がみられる。

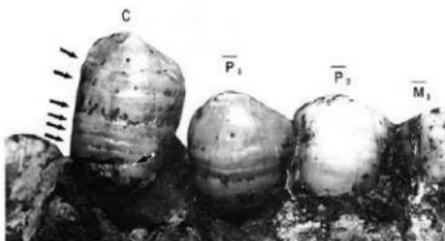


（右）老年女性骨 推定身長144cm

後期 明科町北村遺跡
60歳以上の高齢である。全体に骨が細く、歯槽膿漏にかかっている。



少女の健康な下顎の歯 後期 明科町北村遺跡
13・14歳で、虫歯が1本もないきれいな歯である。



エナメル質減形成のある青年女性の歯 後期 明科町北村遺跡
20～25歳の女性の歯。どの歯にもエナメル質減形成がみえるが、矢印で犬歯のものを示した。



歯石が付着した熟年女性の歯 中～後期 明科町北村遺跡
45～50歳の女性の歯。歯石の付着が著しい。



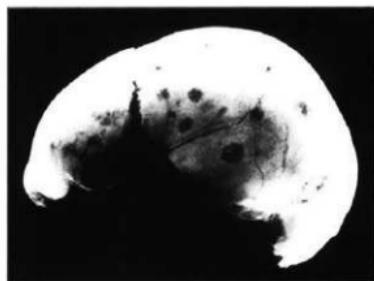
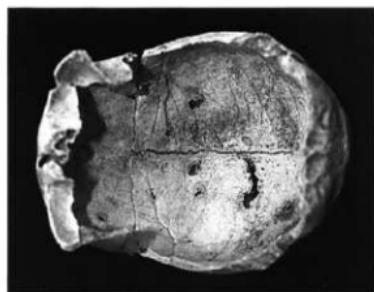
(右) 熟年女性の歯槽膿漏の下顎 後期 明科町北村遺跡
50歳代後半の女性で、矢印部分の歯が脱落している。

時代ごとの1人あたりの虫歯の本数

区分 時代	調査した 人骨の数 (人)	調査した 歯の数 (本)	100人の中 で虫歯をも っている 人の割合 (人)	1人当たりの 虫歯の本数 (本)
縄文時代人 (北村遺跡)	108	1,541	8.7	0.2
弥生時代人	82	1,205	72.0	2.8
古墳時代人	21	539	19.4	0.6
鎌倉時代人	162	2,669	49.4	0.9
江戸時代人	124	638	87.1	1.0
現代人	14,406	300,325	85.5	7.4

縄文人の歯3,200本あまりを対象にした虫歯率は8.2%で、世界の狩猟採集民と比較するときわめて高い率である。しかし北村人は0.76%と低く、植物質食料を多量に摂取していたわりには、虫歯が少ない傾向が明らかになった。

〔北村遺跡〕1993を改変



ガンに侵された頭蓋骨（上）とそのX線写真（下） 後期
福島県三貫地貝塚



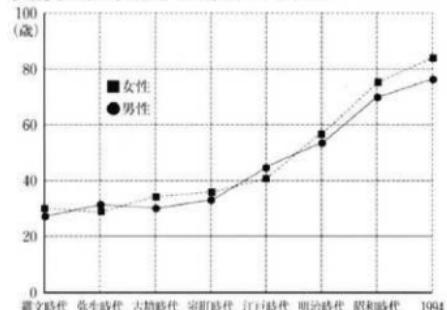
小児麻痺にかかった人骨 後期 北海道入江貝塚

② 縄文人の健康白書

縄文人も現代の三大成人病のひとつといわれるガンに侵されていた。福島県三貫地貝塚

で発見された頭蓋骨には、骨の融解による円形の小さな穴がみられる。女性ならば乳ガン、男性だと胃や肝臓など消化器系のガンが起因しているらしい。いっぽうで幼いころ小児麻痺にかかった北海道入江貝塚9号人は、肢体不自由にもかかわらず、十代後半まで生き延びることができた。寝たきりの人を手厚く介護する入江貝塚の人びとの温かさをみてとることができる。

平均寿命のうつりかわり (Kobayashi, K. 1967より)



縄文人の健康診断

(2) 手厚い埋葬

縄文時代の墓域は日常生活の場に接して営まれ、生前の社会的関係や生者の意識がそこに反映されている。死者が出ると、縄文人は土の中に遺体が入るほどの墓穴（土塙墓）を掘り、手足を折り曲げた屈葬や、手足を伸ばした仰展葬の姿勢で埋葬する。土器で顔を覆う覆被葬や、胸の上に石を置く抱き石葬もおこなわれた。こうした埋葬法から、縄文人は靈魂がさまよい出ることを畏れたことがうかがえる。

岩手県森内遺跡の異様な顔が彫刻された木製品は、トーテムポールか墓標と考えられ、八天遺跡の耳・鼻・口形土製品は墓穴から出土している。このような例から、祖先の眠る集団墓地に死者を葬るときは、仮面をかぶった呪術者が精霊を演ずるなど、さまざまな儀礼がおこなわれて、死者を祖先の世界へ送ったことと想像される。



土塙墓の覆被葬 後期 岡谷市梨久保遺跡



覆被葬の鉢形土器 高さ16.0cm 後期 岡谷市梨久保遺跡

土塙墓・石棺墓の中で遺体の顔を覆う、覆被葬に転用された鉢。

縄文時代後期の中央高地では、土塙墓や石棺墓に葬った遺体の顔を鉢や浅鉢で覆う、覆被葬が流行した。



覆被葬の鉢形土器 高さ28.5cm 後期 東部町古屋敷遺跡

骨を入れた蓋付きの壺 高さ45.0cm 後期 東部町山の越遺跡
いちど埋葬したのち、白化した骨を納める麻布として用いられた可能性が高い。図柄の中を赤く塗っている。

① さまざまな墓

縄文時代の死者の葬り方は、土壙墓に屈葬で葬るのが基本である。土壙墓に屈葬で葬るのが基本である。廐屋や貯蔵穴を利用することもある。縄文後期には土壙の側壁や底に石を用いた石棺状の墓が現れる。この石棺墓は一ヵ所にまとまって集団墓地を形成するようになる。いちど埋葬したのち白骨を取り出して、数体分をひとつの墓穴に埋めなおした集積葬や、土器に納めた瓮棺墓などの再葬もおこなわれた。まれには火葬もあった。副葬品を供える風習はさかんではないが、遺体には耳飾りやペンダントをつけたまま埋葬されたり、ムラのなかでの地位を示すかのように、イノシシの牙でつくった腕輪や胸飾りをつけた例もみられる。



腕を折り曲げた施葬り葬の成人男性 推定身長159.6cm
後期 明科町北村遺跡



石柱をして腕を伸ばした思春期女性 推定身長155.2cm
後期 明科町北村遺跡



土壙墓の墓標 後期 明科町北村遺跡
右の墓の墓標



合葬された2体の人骨 後期 明科町
北村遺跡



土器に入った焼入骨 後期 明科町
北村遺跡



集積葬 後期 明科町北村遺跡
男性3人、女性2人の成人を埋葬から7~8年後に掘り出し、
ひとつの墓穴に埋めなおしている。

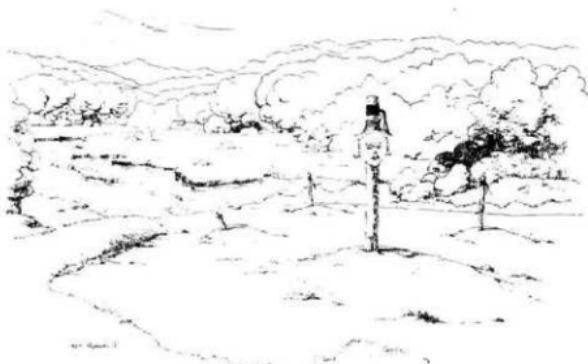


廐屋墓の抱き石葬 後期 長野市村東山手遺跡
敷石住居の床面に成人男性を屈葬の姿勢で葬り、腰の上に石を
のせている。

② 祖先への思い

長い年月にわたって營まれたムラは環状集落となることがある。この中央の広場に墓域を設ける空間設計は、縄文人の心のなかに死者の世界、祖先の居場所がはっきり意識されていたことを物語る。また墓標としての配石造構が、何世代も埋葬をくり返すうちに、大規模な環状列石を形成することもある。こうした集団墓地は、縄文人にとっては祖靈をまつる聖域であったろう。

寒冷化した気候条件のもとで生活した北村人や小諸市岩下遺跡の縄文人们は、家いえに接して、さまざまに石を組合せた墓標をともなう墓をつくった。かれらは祖先をまつて世帯のきずなを強め、子孫の幸福を願って祈りを捧げたことだろう。



土製仮面をつけた墓標復原図 北海道ママチ遺跡（北海道埋蔵文化財センター1998より）

主墓室の口の部分から出土した仮面は、落下して割れたような状態だった。耳の部分にある穴にひもを通し、木の墓標にくくりつけられていた仮面が地面に落ちたのだろうか。



彫刻柱 長さ252.0cm 前期 石川県真島遺跡

数百頭分のイルカの骨の茎柾造構から出土した柱。イルカの雪送りの場のシンボルかもしれない。墓域にもトーテムポールのような柱が立てられていたことだろう。

縄文人から現代人へのメッセージ

縄文人は、自然の恵みに依存して狩猟採集社会を築いてきた。かれらはいっぽうで自然を畏れ、環境を破壊することなく、あらゆる資源を活用して道具をつくり、食料を獲得する自給自足の経済を営んだ。しかも遠距離の交易圏をもつ開かれた社会であった。ムラびとは常に協業や分業で仲間を支えあって、差別や戦争のない平和な生活を営んだ。

現代の科学技術の進歩は日本を世界でも豊かな国の一についたが、その反面で深刻な環境問題が生じ、自分の手でものをつくることを忘れ、競争のかけで差別やいじめがはびこっている。私たちはいま、1万年にわたって戦争もしないで自然と共生しながら、世界でもまれにみる文化を営んだ縄文人をみつめ直すときではなかろうか。

寄稿 繩文人はどこからきたか

国立科学博物館 人類研究部部長 馬場 悠男

北村遺跡の縄文人はどんなひと?

縄文時代人骨の大部分は海岸部の貝塚で発見される。山間部では、縄文人骨はきわめて少ない。だから、1967(昭和42)年に北村遺跡から多数の人骨が発見されたときには、なんとか形態特徴を知りたいと、みんなが期待した。

やがて、京都大学の茂原信生教授(当時は獨協医科大学)らの研究が進むと、北村遺跡縄文人は、基本的には他の縄文人と同じだが、独自な特徴を持つことが分かり、縄文人研究に画期的な一步を築くことになった。

一般に、縄文時代中後晩期の人々は、現代人と比べると、小柄だが、がっしりとしていた。このことは、鎖骨が長く、肩甲骨の筋肉の通る部分が広いこと、上腕骨や大脛骨の筋肉付着部がでっぱり、腰骨が左右に扁平なことから推測されている。北村遺跡の縄文人も、男性の推定身長は158cmであり、筋肉付着部が発達しているのは、他の縄文人と変わらない。少し違うのは、上半身がやや細いことである。逆に考えると、下半身が相対的にがっしりしていたことになる。特に女性では、大殿筋が大脛骨につく殿筋粗面が発達しているので、山菜を求めて山を登り降りしたのだろう。北村縄文人女性のお尻は立派だった。

縄文人の顔は四角く立体的である。この点では、北村縄文人も同じである。また、現代人に比べると硬い食物を食べていたので、咀嚼筋が発達し、同時に歯の減りかたが著しい。この点に関しては、北村縄文人もおおむね同じだが、歯の減りかたが縄文人としては少ない。多分、海岸部の縄文人のように砂混じりの貝を食べる機会がなかったためだろう。

最近では、人骨の安定同位体分析によって、その人の食べていた食品の種類を推定できるが、北村縄文人は動物性食品をほとんど摂らず、もっぱら植物性食品を食べていたらしい。つまり、シカやイノシシを捕ることもほとんどなく、海岸部のように魚や貝を利用することもできなかったのだ。子供のときの成長不良で起きる歯のエナメル質形成不全(減形成)が多かったのも、動物性蛋白の摂取が少なかったためだろう。

奇妙なことに、北村縄文人は一人当たり0.2本の虫歯しかない。これは、縄文人の中でも異例に少なく、歯縫分の多い植物性食品の効果であろう。また、風習的

抜歯のまったく見られないことも注目された。

そのほかに、北村縄文人は、縄文人にしては比較的高齢まで生き、骨折などの外傷の痕が少ないことも分かっている。つまり、彼らは、厳しくも豊かな山間部の環境に適応し、それなりに安定した生活を送っていたといえよう。

北村縄文人はどこからきたか

縄文時代には、日本列島は大陸とは海で隔たれていた。そのあいだ、縄文人の顔や身体の特徴は変わらなかつたので、周辺からの移住者はほとんどなかつたと考えられる。では、縄文時代以前に大陸と陸続きだったときには、日本列島の住人は周辺の人々と交流はあったのだろうか。そもそも、日本列島の住人はどこからやってきて縄文人になったのだろうか。

縄文時代以前の日本列島の化石人骨は極端に少なく、沖縄の1万7000年前の港川人を除けば、断片ばかりである。港川人は、四角い立体的な顎立ちで、咀嚼筋が強く発達していた。また、小柄で、肩や腕は細いが、足腰は丈夫だった。これらの特徴は、北村縄文人とも似ていて、栄養状態の良くない厳しい採集狩猟生活に適応していた結果と考えられ、同時に、後の縄文人の特徴へと連続している。つまり、港川人は縄文人の祖先なのだ。

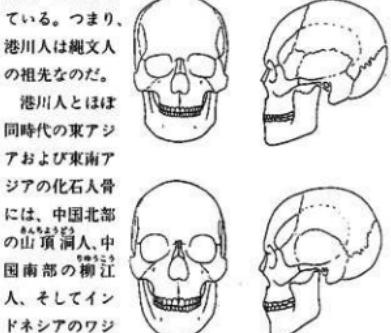


図1 縄文人と弥生人の頭骨比較

縄文人の顔の骨(上)は四角く立体的である。齒が小さいので口元がしまっている。現在の東南アジア人と似ている。弥生人の顔の骨(下)は丸く平坦である。齒が大きいので出角欠けだ。現在の北東アジア人と似ている。



図2 弥生人の日本列島への侵入

シベリアで生まれた北方モンゴロイドが北東アジアに拡大し、2300年前から日本列島に渡来するようになった。彼ら弥生人は、在来の南方モンゴロイドである縄文人と混血しながら列島に広がっていた。

ていることがわかった。したがって、縄文人の祖先である港川人は東南アジアと深い関係があるといえる。

国際高等研究所の植原和郎教授は、現代東南アジア人と縄文人の歯が似ていることから、縄文人は東南アジアからやってきたと説明している。筆者は、その可能性を完全に否定はしないが、むしろ、東南アジアから日本列島にいたる太平洋岸に、当時から同じような特徴を持った人々が住んでいて、お互いの交流も多かったと考えている。つまり、縄文人の祖先はもともと日本列島およびその周辺に住んでいたと解釈したい。

北村縄文人は私たちの祖先なのか

明治時代以来、関東・東北・関西地方では、縄文人骨が多量に発見されてきた。しかし、弥生時代の人骨はほとんど発見されず、あたかも縄文人がどこかへ消え去ったかのようであった。

第二次大戦後になって、九州地方から大量に弥生時代の人骨が発見されてみると、弥生時代の九州にはまったく違う2種類の人々が住んでいたことがわかった。一つは九州の北西部や南部で発見される人骨の人々であり、低身長で立体的な顔立ちは縄文人とそっくりである。もう一つは九州北部で発見される人骨の人々で、身長が高く平坦な顔立ちは、縄文人とは異なり、現在の中国北部や朝鮮半島の人々と似ている。

ということは、弥生時代に、大陸から渡来民が九州北部にやってきたと解釈するのが妥当である。そして、彼らは、在来の縄文人の子孫を、部分的には混血を取り込みながら、大半を駆逐し、関西・関東・東北へ

と広がった。だから、縄文人が消えたように見えるのである。

ところで、弥生時代の渡来民は、なぜ縄文人とは違った顔をしているのだろうか。縄文時代以前には、日本列島も大陸も統一して、同じような人々が住んでいたはずだ。縄文時代に大陸では何が起きたのだろうか。それには、2万年前にシベリアで起こった特殊な出来事にまで遡らなければならない。

人類は熱帯で生まれ、やがて徐々に寒冷な気候に適応していった。しかし、シベリアの零下50度にもなる厳寒の気候に適応できたのは、わずか2万年前のことだった。それには、身体を密閉できるように縫製された衣服、トナカイをしとめられる弓矢、荷物を運ぶソリの発明が必要だった。

このようにして厳寒の気候に曝された人々は、身体や顔も変化させていった。体温の発散を防ぐために、身体はずんぐりし、手足は短くなった。特に、腕や脚の末端近くが短くなつた。顔の凍傷を防ぐために、鼻は低くなり、瞼は厚く重くなつた。眉や髭も少なくなつた。吐く息が「つらら」になって付くと困るからである。さらに、凍った肉をかじるため、また革を噛んでなめすために、歯と顎が大きくなつた。なお、ここでは擬人的な説明をしたが、意識的に大きくなつたわけではなく、そのような条件に適応した個体が選択された結果である。

私たち人類学者は、このように本格的な寒冷気候に最初に適応したモンゴロイドすなわちアジア人を、北方モンゴロイドと呼んでいる。アジア人特有の目が細い平坦な顔は北方モンゴロイドの顔に他ならないことは、すでにお気づきだろう。

それに対し、もともと東アジアと東南アジアに住んでいたモンゴロイドを南方モンゴロイドと呼んでいる。

やがて、5000年ほど前、この北方モンゴロイドがシベリアから拡大し始め、北東アジアの大部分に浸透していった。2300年前には、中国南部の水田稲作技術と共に、ついに日本列島にやってきた。すなわち、彼らこそが、弥生時代を切り開いた渡来民、いわゆる弥生人なのである。

弥生人は日本列島の中央部で人口を増やし、周辺部の縄文人と混血していった。現在では、弥生人の遺伝子は日本人の全遺伝子の7~8割を占めるほどになった。しかし、縄文人の遺伝子も列島の周辺部あるいは東日本では色濃く残っている。北村縄文人の遺伝子も私たちの細胞の中に間違いなく生きているはずだ。

展示資料一覧

番号	資料名	員数	出土遺跡名	所蔵者・保管者	備考
1	いのちの誕生	1	青森県西津軽郡木造町亀ヶ岡遺跡	東京大学総合研究資料館	写真提供
2	妊娠土偶	1	岡谷市広畠遺跡	岡谷市教育委員会	写真提供
3	◎出産土偶	1	山梨県東八代郡一宮町・東山製陶場沼田町軒迦堂遺跡	軒迦堂遺跡博物館	写真提供
4	出産絵のある土器 複製	1	諏訪郡富士見町唐渡宮遺跡	当館 (原資料 富士見町教育委員会)	
5	出産絵がこる骨盤	1	東筑摩郡明科町北村遺跡	当館	
6	○顔面把手付深鉢	1	山梨県北巨摩郡須玉町津金御所前遺跡	須玉町教育委員会	写真提供
7	子抱き土偶	1	東京都八王子市宮田遺跡	国立歴史民俗博物館	写真提供
8	埋甕	3	小諸市岩下遺跡	長野県埋蔵文化財センター	
9	蛭石製石鉢	3	小諸市岩下・三田原遺跡	長野県埋蔵文化財センター	
10	手形付土器	1	山形県村山市西海瀬遺跡	山形県教育委員会	
11	抜歯のある人骨	1	上水内郡中条村宮遺跡	中条村教育委員会	写真提供
2	暮らしと祈り (1) 純文人の日常	1	東筑摩郡明科町北村遺跡	当館	
12	北村人の熟年男性顔面の復原	1	東筑摩郡明科町北村遺跡	当館	
13	外耳道骨盤のある頸蓋骨	1	東筑摩郡明科町北村遺跡	当館	
14	頑丈な大腿骨	3	東筑摩郡明科町北村遺跡	当館	
15	偏摩耗した歯	1	東筑摩郡明科町北村遺跡	当館	
16	化石化したウシコ (糞石)	5	福井県三方郡三方町鳥浜貝塚	福井県立若狭歴史民俗資料館	写真提供
17	石の矢じり (石鎌)	10	東筑摩郡明科町北村遺跡	当館	
18	骨と牙のやじり (骨鎌・牙鑷)	2	小諸市石神遺跡	小諸市教育委員会	
19	弓	1	福井県三方郡三方町鳥浜貝塚	福井県立若狭歴史民俗資料館	写真提供
20	弓苦	1	長野市宮崎遺跡	長野市教育委員会	写真提供
21	動物解体具 (スクレイバー)	10	東筑摩郡明科町北村遺跡	当館	
22	イノシシの骨	3	東筑摩郡明科町北村遺跡	当館	
23	シカの骨	5	東筑摩郡明科町北村遺跡	当館	
24	クマの骨	1	東筑摩郡明科町北村遺跡	当館	
25	タヌキの骨	1	東筑摩郡明科町北村遺跡	当館	
26	魚とりのやす	3	千葉県市原市西広貝塚	市原市埋蔵文化財調査センター	写真提供
27	魚とりの鉛	2	千葉県市原市西広貝塚	市原市埋蔵文化財調査センター	写真提供
28	釣針	2	千葉県市原市西広貝塚	市原市埋蔵文化財調査センター	写真提供
29	泡網のおもり (土器片錐)	10	岡谷市花上寺遺跡	岡谷市教育委員会	写真提供
30	泡網のおもり (石錐)	10	岡谷市花上寺遺跡	岡谷市教育委員会	写真提供
31	漁網のおもり (石錐)	6	長野市東村山下遺跡	長野県埋蔵文化財センター	
32	土掘り貝 (打製石斧)	10	東筑摩郡明科町北村遺跡	当館	
33	編み籠	1	石川県鳳至郡能都町真輪遺跡	能都町教育委員会	写真提供
34	脚のついた石訓	1	中野市栗林遺跡	当館	
35	飾りのついた石皿	1	小諸市岩下遺跡	長野県埋蔵文化財センター	
36	石皿	3	東筑摩郡明科町北村遺跡	当館	
37	凹石・磨石	5	東筑摩郡明科町北村遺跡	当館	
38	貯藏されていたクルミ	10	中野市栗林遺跡	当館	
39	貯藏されていたトチ	5	中野市栗林遺跡	当館	
40	大型の鉢形土器	1	小諸市郷土館跡	長野県埋蔵文化財センター	
41	煮炊きにつかった土器	3	東筑摩郡明科町北村遺跡	当館	
42	煮炊きにつかった土器	4	小諸市岩下遺跡	長野県埋蔵文化財センター	
43	煮炊きにつかった土器	1	塩尻市御垣外遺跡	当館	
44	盛り付けにつかった土器	2	東筑摩郡明科町北村遺跡	当館	
45	盛り付けにつかった土器	1	小諸市岩下遺跡	長野県埋蔵文化財センター	
46	台のついた土器	1	小県郡東部町古座敷遺跡	東部町教育委員会	写真提供
47	壺形土器	1	東筑摩郡明科町北村遺跡	当館	
48	液体を注ぐ土器	3	中野市栗林遺跡	当館	
49	液体を注ぐ土器・杯	2	小県郡東部町賀田遺跡	東部町教育委員会	写真提供
50	容器の蓋	3	東筑摩郡明科町北村遺跡	当館	
51	容器の蓋	2	小諸市郷土遺跡	長野県埋蔵文化財センター	
52	粘土でつくったスプーン	4	東筑摩郡明科町北村遺跡	当館	
53	粘土でつくったスプーン	1	小県郡東部町辻田遺跡	東部町教育委員会	写真提供
54	木鉢	1	福井県三方郡三方町鳥浜貝塚	福井県立若狭歴史民俗資料館	
55	しゃもじ形木製品	1	福井県三方郡三方町鳥浜貝塚	福井県立若狭歴史民俗資料館	写真提供
56	漆塗りの木皿	1	福井県三方郡三方町鳥浜貝塚	福井県立若狭歴史民俗資料館	写真提供
57	磨製石斧	10	東筑摩郡明科町北村遺跡	当館	
58	石斧の柄	1	福井県三方郡三方町鳥浜貝塚	福井県立若狭歴史民俗資料館	写真提供
59	砥石	3	小諸市岩下・三田原遺跡	長野県埋蔵文化財センター	
60	磨製石斧の再利用品	2	小諸市郷土遺跡	長野県埋蔵文化財センター	
61	墨曜石の塊	7	岡谷市大洞遺跡	当館	
62	玉づくりのハンマー	3	大町市一津遺跡	大町市教育委員会	写真提供
63	玉延石	2	大町市一津遺跡	大町市教育委員会	写真提供

番号	資料名	員数	出土遺跡名	所蔵者・保管者	備考
64	翡翠の原石・玉・玉未製品	7	大町市一津逸跡	大町市教育委員会	写真提供
65	翡翠の垂飾り	5	尻尾市上木戸遺跡	当館	
66	滑石の玉・玉未製品	3	大町市一津逸跡	大町市教育委員会	写真提供
67	琥珀の装身具	1	木曾郡南木曾町太田垣外遺跡	南木曾町教育委員会	写真提供
68	ハマグリ	2	小諸市石神逸跡	小諸市教育委員会	
69	イモガイ	1	小諸市石神逸跡	小諸市教育委員会	
70	サメの骨でつくった耳飾り	1	長野市富崎遺跡	長野市教育委員会	写真提供
71	タカラガイ形土製品	1	長野市旭町遺跡	長野市教育委員会	写真提供
72	○巻貝形土製品	1	新潟県岩船郡山北町上山遺跡	東京国立博物館	写真提供
2	暮らしと祈り (2) 繩文人の祈り				
73	耳飾り	13	松本市エリ穴遺跡	松本市立考古博物館	
74	耳飾り	3	中野市栗林遺跡	当館	
75	耳飾りをした土偶 複製	1	山梨県都留市中谷遺跡	山梨県立考古博物館 (原資料 都留市教育委員会)	
76	土製の装身具	4	中野市栗林遺跡	当館	
77	石製の垂飾り	1	北佐久郡御代田町淹沢遺跡	御代田町教育委員会	写真提供
78	石製の垂飾り	2	小諸市岩下・三田原遺跡	長野県埋蔵文化財センター	
79	斧形の垂飾り	1	上水内郡半札村明寺原遺跡	半札村教育委員会	
80	骨製の髪飾り	4	小諸市石神逸跡	小諸市教育委員会	
81	土製の輪輪	3	小黒郡丸子町瀬ノ上遺跡	丸子町教育委員会	
82	大型石棒	1	富山県木見市大境洞窟遺跡	東京大学総合研究資料館	
83	大型石棒	1	東筑摩郡明科町はうろく星敷遺跡	明科町教育委員会	写真提供
84	石棒	4	東筑摩郡明科町北村遺跡	当館	
85	石劍	1	上伊那郡宮田村三つ塚遺跡	宮田村教育委員会	
86	土偶	5	東筑摩郡明科町北村遺跡	当館	
87	土偶 複製	1	上伊那郡辰野町新田泉水道跡	当館 (原資料 長野町教育委員会)	
88	筒形の土偶	1	小県郡東部町古屋敷遺跡	東部町教育委員会	写真提供
89	男根状土製品	1	茅野市櫛畠遺跡	茅野市教育委員会	写真提供
90	石肌状土製品	1	茅野市櫛畠遺跡	茅野市教育委員会	写真提供
91	男女の文様がついた土器			能生町教育委員会	写真提供
92	鼻曲り土面 複製	1	岩手県二戸郡一戸町前前遺跡	一戸町教育委員会	写真提供、原資料愛媛文化財 (原資料 東京国立博物館)
93	土製の瓶面 複製	1	東筑摩郡波田町植現台地跡	当館	
94	仮面形土製品	1	長野市宮崎遺跡	長野市教育委員会	写真提供
95	岩面	1	北佐久郡立科町下屈敷遺跡	児玉今朝耕	
96	○耳・鼻・口形土製品	3	岩手県北上市八天道跡	文化庁、北上市立博物館	写真提供
97	耳形土製品	1	北佐久郡御代田町淹沢遺跡	御代田町教育委員会	写真提供
98	土偶付土版 複製	1	松本市エリ穴遺跡	当館 (原資料 松本市立考古博物館)	
99	土版	1	上高井郡小布施町清水端遺跡	閼谷昌男	
100	三角柱状土製品	1	小諸市郷土遺跡	長野県埋蔵文化財センター	
101	三角柱状土製品	1	小県郡丸子町深町遺跡	丸子町教育委員会	
102	石冠	1	松本市度慶前遺跡	古屋冠司	
103	石冠	2	上水内郡半札村茶臼山遺跡	半札村教育委員会	
104	スタンプ形土製品	1	東筑摩郡明科町はうろく星敷遺跡	明科町教育委員会	写真提供
105	土笛	1	上伊那郡箕輪町御射山道路	箕輪町教育委員会	
106	土鉈	2	小諸市郷土遺跡	長野県埋蔵文化財センター	
107	土偶形土鉈	1	上伊那郡箕輪町中山遺跡	丸子町教育委員会	
108	亀形土製品 複製	1	小県郡真田町雁石遺跡	古屋冠司	
109	人面付小型鍬鉄土器	1	越後郡戸倉町冂光房遺跡	半札村教育委員会	
110	ミニチュア土器	5	東筑摩郡明科町北村遺跡	明科町教育委員会	
111	ミニチュア注口土器	1	小諸市石神遺跡	箕輪町教育委員会	
112	ミニチュア石皿	1	小諸市郷土遺跡	当館	
113	ミニチュア石劍	1	小諸市岩下遺跡	小諸市教育委員会	
3	病と死 (1) 骨が語る縄文カルテ			長野県埋蔵文化財センター	
114	少女の健康な下顎の歯	1	東筑摩郡明科町北村遺跡	長野県埋蔵文化財センター	
115	エナメル質滅形式のある青牛女性の歯	1	東筑摩郡明科町北村遺跡	当館 (原資料 真田町教育委員会)	
116	歯石が付着した熟年女性の歯	1	東筑摩郡明科町北村遺跡	戸倉町教育委員会	写真提供
117	熟年女性の歯槽膿漏の下顎	1	東筑摩郡明科町北村遺跡	当館	
118	埋葬された少年	1	東筑摩郡明科町北村遺跡	当館	
3	病と死 (2) 手厚い埋葬				
119	斐被り葬の鉢形土器	1	小県郡東部町古屋敷遺跡	東部町教育委員会	写真提供
120	斐被り葬の鉢形土器	1	岡谷市梨久保遺跡	岡谷市教育委員会	写真提供
121	斐被り葬の浅鉢形土器	1	飯山市宮中遺跡	飯山市教育委員会	写真提供
122	漆塗器	1	飯山市宮中遺跡	飯山市教育委員会	写真提供
123	骨を入れた蓋付きの壺	1	小県郡東部町山の越遺跡	東部町教育委員会	写真提供
124	彫刻柱 模造	1	石川県諏訪郡都真駒脇遺跡	能都町教育委員会	写真提供

関連資料一覧

(展示・図録掲載順、敬称略)

資料名

- 北村遺跡調査風景（写真）
建設中の長野自動車道明科トンネル付近（写真）
展示品出土遺跡地図
山梨県津金御所南遺跡の顔面把手付深鉢形土器（展開写真）
小諸市三田原遺跡の埋蔵のある堅穴住居（写真）
小諸市三田原遺跡の石跡を型めた敷石住居（写真）
手形をとる親子（写真）
繩文人の抜歯（図）
先史人集団の利用食物の同位体組成（図）
石川県真鶴遺跡縄文土器の脂肪酸分析（表）
山形県押出遺跡クッキー状炭化物の栄養成分表
青森県龍造寺遺跡の狩獵文土器（写真）
岩手県馬立遺跡の狩獵文土器（写真）
秋田県中山遺跡のワラダ（写真）
長崎県佐賀貝塚のシカ笛（写真）
静岡県駿河谷遺跡の矢じりの刺さったシカの骨（写真）
新潟県の貝塚の狩人の墓（図）
宮城県田柄貝塚の埋葬されたイヌ（写真）
中野市栗林遺跡構造分布図・貯藏穴模式図
中野市栗林遺跡の貯藏穴・水さらし場（写真）
調理具と土器・石器（写真）
黒曜石・翡翠・アフスアルト・海の貝の広がり（図）
星嶺町黒曜石採掘跡群鳥瞰図
岡谷市大洞遺跡の黒曜石の塊（写真）
塙尻市上木戸遺跡の翡翠製垂飾り出土状態（写真）
小諸市岩下遺跡全景・景観復原画
山梨県中谷遺跡の耳飾りをした土偶（写真）
耳・鼻・口形土製品の着蓋図（図）
土偶の変遷・呉奈の分布（図）
明科町北村遺跡の土偶・石棒をともなう集石遺構（写真）
明町町北村遺跡の牙製装身具をつけた人骨（写真）
岡谷市花上寺遺跡の土偶（写真）
松本市女鳥羽川遺跡の土偶・複製（写真）
岡谷市中島A遺跡の土偶（写真）
富山県大堀洞窟の大型石棒（写真）
埼玉県馬場小宝山遺跡の土偶付土器（写真）
伊那市百畠刈遺跡の配石遺構（写真）
明町町北村遺跡の青年男性骨（写真）
明科町北村遺跡の老年女性骨（写真）
時代ごとの1人あたりの虫歯の本数（表）
福島県三貴町貝塚のガニにさされた頭蓋骨（写真）
北海道江別貝塚の小児麻痺にかかった人骨（写真）
繩文人の健康診断（イラスト）
平均寿命のうつりかわり（グラフ）
飯山市宮中遺跡の石棺墓群・斐被り葬（写真）
長野市東山手遺跡の埋蔵墓の泡き石葬（写真）
岡谷市製久保遺跡の土壌墓の斐被り葬（写真）
明科町北村遺跡の覆被り葬（写真）
明科町北村遺跡の土壌墓の墓蓋（写真）
明科町北村遺跡の石枕墓の墓蓋（写真）
明科町北村遺跡の石枕墓をした人骨（写真）
明科町北村遺跡の合葬された2体の人骨（写真）
明科町北村遺跡の集石構造（写真）
明町町北村遺跡の焼人骨の墓標（写真）
明科町北村遺跡の土器に入った焼人骨（写真）
明町町北村遺跡の埋葬墓勢変分布図
北海道マムリ遺跡の土製仮面を付けた袋懸復原画

所藏者・提供者・出典

引用・参考文献 (テーマ別、総著者名五十音順、前項目に記したもののは後は略す)

- 1 縄文時代全般にわたるもの
1 江坂輝彌ほか 1973『古代史発掘Ⅱ 縄文土器と貝塚』講談社
2 江坂輝彌ほか 1974『古代史発掘Ⅲ 土偶藝術と信仰』講談社
3 加藤晋平ほか 1982~1984『縄文文化の研究』1~10 雄山閣
4 鎌木義昌ほか 1965『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』河出書房
5 小林達雄ほか 1986『II 縄文文化』『縄文発掘が語る日本史 2 関東・甲信越編』新人物往来社
6 小林達雄ほか 1988『古代史復原Ⅲ 縄文人の道具』講談社
7 小林達雄ほか 1993『中部縄文文化の展開』『新阪古代の日本 7 中部』中央公論社
8 佐々木高明 1991『日本の歴史 1 日本の誕生』小学館
9 佐原 真 1987『大系日本の歴史 1 日本人の誕生』集英社
10 鈴木公雄ほか 1988『古代史復原Ⅱ 縄文人の生活と文化』講談社
11 戸沢克則ほか 1989『第2回原始文化の繁榮』『長野県史 通史編第1巻原始・古代』
12 長野県史刊行会 1988『長野県史 考古資料編全1巻(4)遺構・遺物』
13 春成秀爾ほか 1992『III 縄文時代』『図解・日本の人類遺跡』東京大学出版会
- 2 展示全体にわたるもの
14 長野県埋蔵文化財センター 1993『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11~明科町内~北村遺跡』
15 平林 彰 1995『北村縄文人の墓と社会』『縄文人の時代』新泉社
16 宮下健司 1991『縄文人の歳時記』『縄文時代の時間と空間ー』『日本村落史講座』6 雄山閣
17 宮下健司 1992『長野県の土偶』『国立歴史民俗博物館研究報告』37
- 3 「1 いのちの誕生」に関するもの
18 斎藤博己 1993『縄文人の産育儀礼』『新視点日本の歴史 1 原始編』
19 須玉町教育委員会 1987『津金御所前遺跡』
20 中条村教育委員会 1993『三田遺跡』
21 長野県埋蔵文化財センター 1992『三田原遺跡群・岩下遺跡』『年報』9
22 国立歴史民俗博物館 1985『日本の歴史と文化』
23 富士見町教育委員会 1988『階渡宮』
24 宮塚義人ほか 1972『八王子市宮田遺跡の調査(I)』『多摩考古』12
25 山梨県埋蔵文化財センター 1986『駿河堂遺跡』
- 4 「2 幕らしと祈り (1) 縄文人の日常」に関するもの
26 青森県教育委員会 1985『葦笛遺跡』
27 大町市教育委員会 1990『一津壹跡』
28 岡谷市教育委員会 1987『花上寺遺跡』
29 金井町教育委員会 1977『室の貝塚』
30 上総国分寺古墳遺跡調査団 1977『西広貝塚』
31 小諸市教育委員会 1994『石神』
32 東郷町教育委員会 1986『不動坂遺跡群Ⅱ・古屋敷遺跡群Ⅱ』
33 東郷町教育委員会 1995『田中遺跡』
34 中野益男 1995『残留脂肪酸による古代復原』『全面改定新しい研究法は考古学に何をもたらしたか』クバプロ
35 長野県埋蔵文化財センター 1988『大洞遺跡』『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1』
36 長野県埋蔵文化財センター 1989『御堂垣外遺跡・上木戸遺跡』『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2』
37 長野県埋蔵文化財センター 1994『県道中野豊野線バイパス志賀野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書-長野県中野市内-栗林遺跡・七瀬遺跡』
38 長野市教育委員会 1988『宮崎遺跡』
39 能都町教育委員会 1986『真鍋遺跡』
40 福井県教育委員会 1979『鳥浜貝塚』
41 福井県教育委員会 1987『鳥浜貝塚』
42 南川雅男 1995『炭素・窒素同位体に基づく古代人の食生態の復原』『全面改訂新しい研究法は考古学に何をもたらしたか』クバプロ
43 宮下健司 1988『縄文世界を動かす道具』『古代史復原』3 講談社
44 宮下健司 1995『長野県の縄文文化-新しい縄文時代観-』『信州の文化』II 八十二文化財団
- 5 「2 幕らしと祈り (2) 縄文人の祈りと祭り」に関するもの
45 明科町教育委員会 1991『ほうろく座敷道路』
46 飯田市教育委員会 1994『中村中平遺跡』
47 一戸町教育委員会 1988『時雨』
48 浦和古教育委員会 1982『馬場小室山遺跡』
49 小布施町史編纂委員会 1975『小布施町史』
50 北上市教育委員会 1978~1979『八天遺跡』
51 小林達雄 1990『縄文土偶の世界』『季刊考古学』30 雄山閣
52 小林幹男 1982『下屋敷遺跡』『長野県史 考古資料編全1巻(2)主要遺跡(北・東信)』
53 竹原 学 1995『全身表現のみられる人面付土版-長野県エリ穴遺跡出土土版をめぐって』『日本考古学』2
54 草野市教育委員会 1990『棚原』
55 都留市教育委員会 1973『中谷遺跡』

- 56 戸倉町教育委員会 1990『円光房遺跡』
 57 長野県教育委員会 1973「百駄丸遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—伊那市西春近』
 58 長野県史刊行会 1982『長野県史 考古資料編全1巻(2)主要遺跡(北・東信)』
 59 長野県埋蔵文化財センター 1992「郷土遺跡、三田原遺跡群、岩下遺跡」『年報』9
 60 永峯光一 1983「越文儀礼を説く」『神道考古学講座』1 雄山閣
 61 能生町誌編纂委員会 1986『能生町誌』
 62 文化庁文化財保護課 1990「越文時代のアクセサリー」「月刊文化財」326
 63 丸子町教育委員会 1979『深町』
 64 箕輪町教育委員会 1979「御射山遺跡緊急発掘調査報告書」
 65 箕輪町教育委員会 1984「中山遺跡緊急発掘調査報告書」
 66 宮田村誌編纂委員会 1982「宮田村誌 上巻」
 67 御代田町教育委員会 1993「浅沢遺跡発掘調査概要報告」
 68 牟礼村教育委員会 1980「明導寺・茶臼山遺跡」
 69 ヴィクター・W・ターナー 富倉光雄訳 1976『儀礼の過程』思索社
- 6 「3 病と死」に関するもの
 70 大塚和義 1979「越文時代の葬制」「日本考古学を学ぶ』3 有斐閣
 71 例谷市教育委員会 1986「梨久保遺跡」
 72 鈴木隆雄 1995「骨から読みとる古代人の病気」「全面改訂新しい研究法は考古学に何をもたらしたか」クバプロ
 73 高橋 桂 1982「宮中遺跡」『長野県史 考古資料編全1巻(2)主要遺跡(北・東信)』
 74 東部町教育委員会 1992「久保在家遺跡」
 75 長野県埋蔵文化財センター 1990「村東山手遺跡」「年報」7
 76 福島県立博物館 1994「三貴地貝塚」
 77 北海道埋蔵文化財センター 1987「千歳市マチ遺跡」
 78 Kobayashi, K. 1967 Trend in the length of life based on human skeletons from prehistoric to modern times in Japan. J. Fac. Sci. Univ. Tokyo (V) 3(2),

協 力 者

企画展開催および図録作成にあたって、多くの機関ならびに個人のご協力をいただきました。記して感謝の意を表します。
 (機関・個人別五十音順、敬称略)

青森県埋蔵文化財調査センター、明科町教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター、飯田市教育委員会、飯山市教育委員会、一戸町教育委員会、市原市埋蔵文化財調査センター、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、浦和市教育委員会、大町市教育委員会、岡谷市教育委員会、北上市立博物館、国立歴史民俗博物館、小諸市教育委員会、さらしなの里歴史資料館、积迦堂遺跡博物館、須玉町教育委員会、立科町教育委員会、茅野市尖石考古館、都留市教育委員会、東京国立博物館、東京大学総合研究資料館、東部町教育委員会、東北歴史資料館、中条村教育委員会、長野市埋蔵文化財センター、長野市立博物館、南木曾町博物館、能生町教育委員会、能都町教育委員会、浜松市博物館、永見市立博物館、福井県立若狭歴史民俗資料館、文化庁、松本市立考古博物館、丸子町教育委員会、峰田教育委員会、箕輪町郷土博物館、宮田村教育委員会、御代田町教育委員会、牟礼村教育委員会、山形県埋蔵文化財センター、山梨県立考古博物館

全田 達、青木和明、赤澤 威、安部 実、磯村賢治、伊藤章一郎、猪股善彦、井上洋一、今高利恵、宇賀神誠司、白田武正、大沢 哲、大塚和義、小川忠博、小山内玲子、忍澤成視、小原 稔、大日向正男、加藤三千雄、金田景子、小池 孝、児玉今朝雄、後藤裕紀、小林秀夫、小林深志、小山岳大、近藤 敏、桜井秀雄、佐々木洋治、茂原信生、柴登巳男、宇田哲男、末木 健、鈴木隆雄、岡谷昌男、高田和徳、高田秀樹、高橋昌子、滝沢敬一、田村 椎、寺内貞美子、寺崎重雄、中村明央、島中雷隆、馬場悠男、廣瀬昭弘、古屋冠司、星野保彦、囲田雄二、本堂寿一、翠川泰弘、望月静雄、矢口忠良、山口 明、山路恭之助、横山かよ子、吉川博美

- 運営／免行 長野県立歴史館
〒387 長野県更埴市屋代清水260-6
料野の歴史公園内
TEL (026) 274-2000㈹
- 発 行 日 1996年7月20日
- 印 刷 ほおざき書籍株式会社
〒380 長野市柳原2133-5
TEL (026) 244-0235